

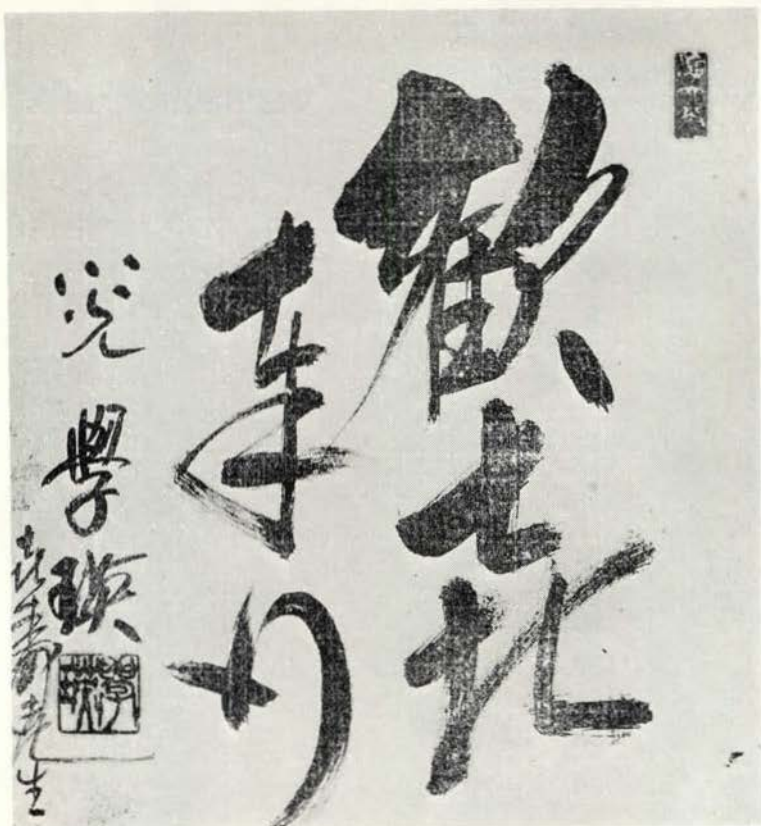
土 淨

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 每月一回一日發行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雜誌）第三二五号
昭和五十年九月二十五日印刷 昭和五十年十月一日發行
第四十一卷 第十号



S. Kuz

1975
10



歡喜奉行

東京芝心光院

戸松学瑛 僧正 遺墨

故学瑛老僧の好んで書いた文句である。

・カンギブギョウと声に出しながら書きなぐった姿が目に見え。昭和三十五年、喜寿の祝いに檀家の方々にあげたもので、裏に、

仏教の本意

よろこび はた楽

と書いてある。

蓋し老僧九十年の生涯のモットーであった。

(愚息啓真記)

十 月 号



目

次

- 歓喜奉行……………故 戸松学瑛翁
- 現代に生きる念仏……………河 波 昌…(2)
- お十夜によせて 鎌倉十夜と鐘講中 ……………高 麗 義 光…(6)
- 特集 現代のモラルを考える⑧「飲酒」……………山崎宏・藤堂恭俊・大元良成…(10)
- ご法語をいただく 法然上人の人と生活⑩
- 配流の旅を「朝恩」と感じて……………宝 田 正 道…(21)
- ハワイに生きる(上) 一日系人社会史……………新 保 義 道…(26)
- 書の四季⑦ 仏教書道の夜明け……………林 錦 洞…(30)
- 釈経歌集 「続々法の衣」に就いて④……………石 昌 俊 徳…(32)
- 念仏ひじり三国志⑬法然上人をめぐる人々……………寺 内 大 吉…(38)

表紙 久住静雄画

カフト 大正大学美術部



現代に生きる念仏

— 情報化時代と新しい浄土教 —

河 波 昌

(東洋大学教授)

人類はその成立以来、数度にわたる偉大な革命をなし遂げてきました。食物生産革命、都市革命、産業革命、そして今や新たに情報化時代へ突入しつつあるといわれています。そしてそれらの革命は、単に生産力等にかかわる物質的な次元のみにとどまるものではなく、さらには人間の精神の革命とも深くかかわりあっていたのであり、したがって宗教のあり方もまたそれらの革命と相応していた、という点も考えられねばなりません。仏教やギリシャ哲学等の古代宗教文明が都市革命と不可離の關係にあり、プロテスタンチズムが近代市民革命と相応している点などもすでに指摘されているところです。宗教がとりわけ永遠不変の真理を目ざす点で、歴史を超える

面をもつにもかかわらず、また他面にはそれぞれの時代にふさわしい在り方がそれぞれの宗教に要請されるゆえんでもあります。

さて法然上人によって立教開宗された念仏の法門が、日本歴史における古代から中世へのまさに転換点において成就された日本最大の宗教革命であったことは論を俟ちません。そしてその法門が、永遠の真理の法門であるにもかかわらず、そのような歴史の転換点において生じたという点でわれわれは注目するのであります。そしてその念仏の教えが、中世以降の日本人の精神をその根柢から支えてきた点で、そのはかり知れない意義を認めねばなりません。その念仏の法門は、今や情報化時代に

突入せんとする現時点においては、さらにその念仏に対する視点を前向きに考え直す必要にせまられているという点も反省されねばならないでありましょう。しかもそれは念仏を単に時代に迎合させるという安易なかたちによつてではなく、あくまでも念仏をその原点にひきもどして考えなおすという意味においてなのであります。

そのように念仏そのものをもう一度大乘仏教の源流にまでひきもどして考えようとする場合、その念仏の法門が情報化時代にとつてもまた不可欠の意義をもつものであることが知られてくるのであります。そしてまた念仏に照らしあわせて考えてみると、情報化時代におけるその情報自体の本来的な意味をよみとることもできるのであります。

情報と念仏、それは一見するに、歴史的ななりゆきから出てきたまったく偶然のなくみ合わせと見えるかも知れませんが、しかしながらよく考えてみると、浄土の法門とは、実に情報論的ともいえる真理の構造から由来してきている法門であるとさえいえるのです。また情報とは単に社会における人間相互の知的な伝達という意味を超えて、それはひとりひとりの人間にとつて想像を絶

するほどの重大な意味をもつものであると考えられるものなのであります。わたくしたちは平常、見聞覚知する知識の主体として行動しているのでありますが、そのような方自体は、自分が意欲してそうなっているのではなく、気がついてみればそもそも最初からそのような存在として生かされていたことに気づかねばなりません。たとえば眼という感官一つにしても、それは人類のあらゆる科学技術をもつてしても作り上げることはできないでありましょう。発生論的に見ても眼の形成には数千億年の生物の進化を考えなければなりません、そのような器官の発生の探究は宇宙そのものの根源的な不思議な神秘に連つていなのです。わたくしたちの日常における感覚活動の一つ一つにも、そのような意味で不思議な背景を宿しているのであり、かかる宇宙の根源への思いを忘失することはできないのであります。むしろコンピュータ等の機械のみに関心を集めている人間の計り事は、そのような観点から見ると、また情報自体の存在論の意味から云つても第二義的、第三義的な意義しかもちえませんが、そしてむしろそのような本源を忘失した情報の洪水によつて人間の主体性そのものを喪失すると

いうことほどの転倒はないでありましょう。情報活動とは、すなわち人間の見聞覚知等の活動とは、何よりも宇宙の不思議な（宗教的な言葉を使えば）如来の業用（ごうよう、成所作智）としていただくことが原点となつて参ります。そのことを忘失しては、いかに情報化時代とは云え、情報の根源自体の忘失の時代と別とは云えないのであります。

そのように受けとるとき、わたくしたちの信仰もまた情報活動と切り離して考えることはできません。まずたとえば印刷物等がそうであるように、伝統的な浄土の經典や祖師たちによつて教示された文書等が情報としての意味をもちます。經典等は「法界等流の教門」（『宇宙の根源から流れ出る真理の教え』）といわれるように、それらの情報を媒介としてわたくしたちは浄土の信仰にも入ることができます。しかもそこで大切なことは印刷物としての經典自体が重要なのではなく、その經典を通して語りかけてくる宇宙の真理そのものが重要であるという点なのです。『阿弥陀經』の中の一節である「今現在說法」の文も、宇宙そのものが阿弥陀仏として情報活動しているものと考えられるのであります。

たがって極楽世界もまたそのような意味で阿弥陀仏の根源的な情報空間であるといえるのです。またわたくしたちの地上的なひとみとしての説法、法話、宗教音楽、法式儀礼等の伝導活動も、そのような超越的な存在に連つており、かかる存在の働らきとしての情報活動と見るとき、わたくしたちはそれらを機縁として阿弥陀仏自体に直結してゆくことができるのであります。そしてそのような目に見えない信仰の世界に心を通わしてゆくことができるようになると、単に經典や説法等のみがではなく、わたくしたちが直接触れてゆく大自然そのものもまた情報の当体（『阿弥陀如来御自体』）となつてゆくのです。すなわち山川草木のたたずまいから星のきらめき、鳥の聲に至るまで超越的な情報活動となつてゆくのです。蘇東坡居士の「溪声是広長舌 山色豈清淨身」の句や、また山崎弁栄上人の「アメリカの山の奥にも聞こゆらん、その風の音般若波羅蜜」の道詠等も、まさにそのような根源的な情報としての消息を物語っているものと云えます。

そのような観点から見るとき、阿弥陀如来御自体が情報の根源（者）ともいただけてくるのであり、衆生であ

るわたくしたちは、信不信にかかわらず、かかる情報的根源者のうちに包み活かされ、その中からわたくしたち衆生の一人一人が情報的主体として成熟せしめられてきたのであります。そしてまたそのように情報的主体として成熟せしめられたわたくしたちが浄土の信仰に入り、念仏することによって情報の根源者なる阿弥陀仏と根源的なコミュニケーションの道が開かれてゆくことになり、無限に阿弥陀仏の世界に通入せしめられてゆくことにもなるのであります。念仏の念とは、本来的にはまさにそこで情報活動としての阿弥陀仏とのコミュニケーションの開かれる場処なのであり、またそこで我執的な個我が打ち破られ無限に阿弥陀仏の眞実の世界が開顕せしめられてゆくところの場処となるものであります。否むしろわたくしたちの念するその念において、実は今までわたくしたちに気づかなかった五劫思惟非載永恒の救済意志たる大慈悲心の働きかけていたことに気づくのであり、まさにそのようなかたちで阿弥陀仏の悟りの世界のうちにわたくしたちが包み込まれてゆくことになるのであります。往生とはまさにかかる阿弥陀仏の情報活動の開けのうちに成就してゆくものとも云えましょ

う。念仏の念とは、まさにその一字の中に大乘仏教の全体が包み込まれてしまうほどの重大な内容をもった働らきをするものであります。それはまた阿弥陀仏御自身の御働らきとしての情報活動の当体に直結し相即しているものでもあるのです。そのような念の働らきの重要さは『観無量寿経』の中にも次のように示されています。すなわち

「……当に仏を想うべし、所以はいかん。諸仏如来は是れ法界身なり、一切衆生の心想の中に入りたまう。是の故に汝等心に仏を想う時……是の心仏を作る、是の心是れ仏なり。諸仏正偏知海は心想より生ず……」とありますが、この文の中に仏（すなわち情報）の根源的構造が示されています。すなわちわたくしたちの想念とは、まさにそれにおいて如来がわたくしたちの心の内に入り来り働き給う（into-form）ことであり、そのようにしてわたくしたちのうちからきわまりなき深い内面性が成就せしめられてゆく（in-form）のであります。宇宙の情報活動は念仏にきわまっているとも云えるのです。情報化時代において、とりわけ念仏の念に思いをかけるべきであります。



〓お十夜によせて〓

鎌倉十夜と鐘講中

— 檀家の一青年と住職の会話 —

高麗義光

(神奈川県三浦市光念寺住職)

(青年) またお十夜の季節になりましたね。去年お十夜にお参りに来た外人から、この祭りは何だときかれて、テン・ナイツと答えたら目を丸くしていましたっけ。鐘講の念仏は仲々いいハーモニイだといってほめていましたね。……この寺は鎌倉光明寺の何代目かが隠居して来て、真言宗を浄土宗に切りかえたと前に伺いましたが、総本家の光明寺から「お十夜」を持ち込んで来て、地域の教化に使った訳ですね。

(住職) 鎌倉を中心とする地域に十夜法要が独特な形で、深く浸透していったのはたしかですね。光明寺の十

日十夜の特別法要をそれぞれの末寺が分配して貰って、わが寺は三日三夜、わが寺は二日二夜、わが寺は一日一夜というふうに、十日間の法要期間のうち、三日三夜の光明寺分を残して、七日七夜を何十ヶ寺で分配したんですから勘定も何も合いやすい。本家ののれんを分けてもらって、それぞれ十夜を開いていった訳です。そしてこの地域の十夜を中心は、何といっても鐘講だった。鐘と太鼓で念仏ののど自慢をする信者グループが、僧侶の十夜法要の中にとけこみ、賑やかで野趣横溢する雰囲気をつくり上げて来たのです。

(青年) 郷土芸能といえはいますね。

(住職) お十夜の鐘講というものは、キリスト教の聖歌隊に当るといえます。あなたはトマス・ハーデイの「緑の木蔭」という牧歌的な作品を読んだことがありますか。村の人々、特に老人たちがめいめいの楽器をぶらさげて教会へ集って来る。教会の儀式に参加する。彼等の生活にとけこんでいる教会音楽、それに似た愉しさというものが十夜の鐘講には、かつてあったと私は思います。今は殆んど衰微してしまいましたが、鐘講の盛んな頃の思い出話をするのも一興でしょう。浄土宗の鐘講は日蓮宗のお題目講とよく比較されますが、日蓮宗の僧侶と講中の関係は、ある意味では重なり合っています。同じ法華経を称え、同じ題目を合唱する。ところが十夜における僧侶と鐘講との関係は全然別のパートをもち、法要の中で選手交代をする。僧侶の読経中鐘講は沈黙、鐘講の出番となると僧侶は沈黙、それでお互いにからみ合って、一つの儀式を成就するということです。

(青年) 老人たちの娯楽の一つになっていましたね。俳句にも十夜爺、十夜婆なんて言葉があります。

(住職) 極楽往生を願う念仏信仰の一形態ですから、ど

うしても老人が多かったでしょうが、お十夜は地域の祭、生産の喜びと収穫への感謝も含めて、大人から子供まで村全体の旗日だったと思いますよ。さてその鐘講ですが、大体この講中に入って来る男は、何んといつてものが良くなくてはならない。結果として念仏信仰の一形態とはなるが、本人には念仏への信仰心など一片もなくてもかまわない。ただ縁起かつぎだけは除外されるし、当人も参加はしない。田舎には寺のこととなると、馬鹿に尻込みをする御弊かつぎがいたものです。神事はよいが仏事はいやという。そうでない人で暇があつて歌うことが好きという男衆は、知合いからの勧誘が鐘講に入る。床屋さんあり、米屋さんあり、あんなさんありで、にぎやかな講中には師匠株がいて、十夜の二月前位から寺或いは仲間の自宅に集って稽古をつける。勿論譜面はないから口うつし、手拍子、膝を叩いて独唱、合唱、鳴物と伝授する。座付き・半座・六字詰・歌念仏など、序曲から終曲まで一くさりの教会音楽です。

(青年) 私も前に二三度聴いたことがあります。十夜法要のはじまる前からドンチャンドンチャンと呼込みのようなことをやっていましたね。

(住職) お十夜へ詣れ詣れと、せきたてている訳です。

(青年) 酒をのんで鐘を叩いている人もいましたよ。

(住職) 一つの愉しみですからね。しかし法要がはじまり、僧侶の儀式の中に鐘講の役割がキチンとはまりこむ段となると、彼等にはわかに緊張します。阿弥陀経を読みながら、本堂内陣を五六間ぐるぐる回る僧侶の行道というのが終り、導師が登高座して「修し奉る十日十夜別時念仏法要、西方願王阿弥陀如来成正覺大慈恩」と声高らかに十念を称える。十回の念仏を彼等は息をこらし、指を折って教える。この十念から直ちに法要の主導権が鐘講に引きつがれるからです。役鐘と称する鐘講の師匠株の念仏がはじまると、導師以下の衆僧は沈黙、専ら俗人の教会音楽団の称名が堂内にひびきわたる。念仏のソロが合唱にかわり、六字誥・かけ念仏・山道・四つ打ち・雷落しと、変化にとんだ念仏が、鐘と太鼓と雲版と鈴とで延々二十分程も称えられる。この念仏は雷落しで導師に引渡され、その高唱十念で法要が終り、導師が外陣へ十念授与をする時、彼等はまっ先に椅子、座布団から離れ、頭を畳にすりつけてお十念を受けとる。導師以下の退場には送り念仏という。哀愁切々たる文句を鐘

講の主座が唱う。へ若いとて、すえをはるかに思うなよ、無常の風は時をえらばず、とか、へ花娘、いつの間に年をとり、梅干し婆々となりにけり、といった文句が導師以下を送り出し、行列が本堂から渡り廊下にかかると、トタンに鐘は陽気なチャンチャも打ちと変り、それから後は鐘講の独断場、再び歌念仏がはじまる。間々逸の諷刺もあれば、いささか卑猥な文句もまじる。へこぼれ松葉をアレ見やしんせ、枯れて落つるも二人づれ、へ両手合せて片膝ついて、山で木を切るきこりどの、へ蝶々とまれや娘の髪に、それに飽きたら極楽浄土、蓮のうてなにチョイととまりやんせ、といったふうのものです。

(青年) そういえば僕が聴いた文句が悲しいのがありましたよ。へ形見に残せし風車、廻してみれども味気なや……子どもを失った親の哀しみがじいんと来しました。

(住職) 先程鐘講には信仰心などみじんもない輩でも、声さえよければ入れるといいましたが、面白いことにはこの中には祭礼の木遣師もいれば、お題目の信者もいる。それらがこの日ばかりは即席の念仏行者となつて「なんまあいだあぶつ」とやるんですから傑作です。南

無阿弥陀仏に変化のある節がついて、「なんまいどうへい」となり、「なんまいぬうへ」となり、「なんまいのっぺ」となまった末に「あーいのっぺちのっぺち」となっている。原語は完全に姿を消しています。三浦半島の各地域で口から口へ語りつがれた十夜念仏ですから、それぞれの地域、各寺の鐘講の個性は濃厚です。てんでに勝手な節まわしを伝えて来ているのですが、曲の順序次第はキチンとまもられている。この各地域独特の節まわしを、キチンと統合して正しく南無阿弥陀仏々々々々と、引声念仏として継承させようと努力した住職もありましたが、所詮は十夜法要前後に限って集合離散する任意集団ですから、当日ともなれば昔からの語り癖でやつつける。私は、それでよいと思っています。生じつか、法式の先生が正しい音程になおそうなどと干渉してはいけないと思います。木遣師や日蓮宗信者までが集まって来て道楽半分、面白半分に一ぱい気嫌で「ソレなんまいだあぶつ」とやるところが面白いと思っています。まさしく民俗芸能の素朴さ、泥臭さ、哀感がそこにはあると思っています。十夜法要の意味もよく分らない、浄土教の真髄にも我れ関せず、ただ年に一度暑くもない

寒くもない季節に、日ごろ抹香臭くて陰気な寺を、灯もこうこうと鐘太鼓でドンチャンドンチャンと賑やかす大衆の集団行為が、実のところ浄土宗の伝統を、浄土宗の看板を守って来たのではないのかと思うのですよ。先程もいいましたが、ハーデイが教会音楽隊についてこういっています。「教会音楽隊を改良しようとして演奏家を牧師館の関係者に限定したため、操作や出来ばえはよくなったものの、教区民の教会に対する関心は減退してしまつた。あの過ぎし日の村民音楽師たちの熱心さこそ、はげしく根強かつたものはない。手で書き写され綴られた譜本は聖歌と俗曲がまじりあい、時に甚だ奇怪な趣きを示すのだった。」どうです。十夜の鐘講の消長に似ているでしょう。

（青年）古きよき時代への感傷ですか。

（住職）昔を今に返せるものではありませんが、古老の言葉や、自分の幼児期の記憶をたよりに思い出してみるとなつかしいものです。カーバイトの匂う大正の夜の郷愁です。都会のお十夜にはない農漁村のユーモラスな十夜風景です。

飲酒



現代のモラルを考える

第八回

山崎 宏

(立正大学教授・文庫)

仏教では御存じのように飲酒は、五戒の一つとして禁じられている。しかし部派によっては、五戒は全部守らなくとも、一戒でも二戒でも守ればよいといわれている。一般に殺・盗・淫・妄語は性戒といい、それ自体が性悪なのに対して飲酒は、遮戒といい、それによって諸悪が誘発されることがあたるめに禁するので、前の四戒と別に見られている。そして飲酒を四戒に加えて五戒としたのは、仏弟子の中でも有力な莎伽陀が、酒を飲んで醜態を演じたことがあってからであるという。

いわゆる戒律とか刑法などというのは、害悪が生ずると規定されるものである。道徳や宗教もそうで、苦悩や害悪の

ない場合には、そうしたものは余り発達しない。往々して中国に儒教、印度に仏教が生まれ、西洋にキリスト教が発展したのに対して、わが国にはそうした優れた倫理や宗教が現われなかったことを嘆く人がいるが、私はそう悲観はしない。古来日本人は淡泊・單純・温和で、社会に比較的深刻で凶悪なことが起らなかったのである。この点、旧中国では一夫多妻の大家族間にかかる複雑な人間関係について、強い道徳規範が必要であった。また印度ではカーストによる根強い差別観、灼熱の太陽の下にあからさまに行なわれる人間の醜い生きざまに対して、慈悲平等の思想や厳しい戒律などが必要であった。これに比べて日本では僧界でも戒律は厳しくない。

殊に飲酒の戒は、守られている例は稀である。勿論、「不許葷酒入山門」などと大書せずとも持戒堅固の高僧は、あるにはあるが、タイやヴェトナムの仏僧などは、現在の日本仏教には戒律はないともいっている。然しこれを必ずしも仏教の墮落とはいわれない。古来、日本では「御神酒^{みかみ}あがらぬ神はない」などといって、神事祭祀には必ず酒を用いた。

酒という字は、もとは酉で、酉は神に捧げる徳利型の容器をかたどった字であり、シ偏は、中に液体すなわち酒があることを示そうとして付けたのであるという。すなわち酒は元来、宗教的なもので、祭祀の後に人々が頂いたのである。なお酉に関連して醫という字の古字を見ると、豎となっている。この字の医は、診療函の中に矢すなわち外科医が用いる刃物が入っている形で、爰は手で、手にメスを持ち手術をすることを意味するが、巫はミコで、古代では地位も高く、尊ばれた宗教家であった。すなわち豎という字は、巫が加治祈禱・医術を心得て尊信されていた古い時代に造られた文字であったのに対し、医は治病には巫の加治祈禱などよりも、酒が有効であることを知るに至った時代に、巫を酉に取替えて造った文字であった。ここに至って酒は、当時の医学・薬学や醸造術など、時の科学技術の協力によって百薬の長にのし上った。

たのである。

いまこれに関連して特に、酒の博士として有名な坂口謹一郎氏に説いてもらおう。

「日本の酒は、日本人が古い大昔から育てあげてきた一大芸術的創作であり、またこれを造る技術のほうから見れば、古い社会における最大の化学工業のひとつであるといえる。したがって古い時代の日本の科学も技術も、全部このなかに打ちこまれていたわけであるから、日本人の科学する能力やその限界も、またその特徴もすべて、この伝統ある技術をつぶさに調べることによってうかがい知ることができであろう。

(中略) われらは、日本の酒の古くからの造り方を究めることによって、日本民族が、科学上の独創力においても他に劣るものではなく、また中国技術の影響をうけたにしても、中国周辺の他の諸国とは異り、決してそれをウノミにしているのではない、という自信を深めざるをえない。」(坂口博士「日本の酒」の序文)

と。実に至言であるが、このことは同時に世界の著名な酒類について見ても、それぞれ同じようなことがいえるのではないだろうか。

余談になるが、私は十年程前にアメリカのワシントンで開かれたアジア学会の大会に、招待されて行った。学会が終ってから、会長のイエール大学教授ライト博士の肝いりで、イエール大学の在るニューヘヴンにゆき、レセプションに招かれた。出席者は十名程であったが、未知の人が多かったのだ、私は話題に窮してついに酒の話に及んだ。乾杯を重ねるにつれて話に花が咲いて来た。そこで私は、酒はその風土・民族の造り出した高級の文化で、古く独特の優れた文化をもつ国には、それぞれ誇るべき美酒がある。これをヨーロッパで例えればイギリスのウィスキー、フランスのブドウ酒、ドイツのビールのようなものであるが、わが日本酒もまた優にこれに比肩するものであると論じ、ついでに貴国に如何なる固有の美酒ありやと問うた。これには列座の諸公も返答に窮し、一時座が白らんだかに見えた。そこで私は酔余の勢で、諸君憂うる勿れ、アメリカにはカクテルがあるではないか、これぞ世界に誇るべき貴国の発明ではないかとやった。ここで異邦の酔客もわが意を得たりとばかり喝采し、一段となごやかになって会を閉じたことがあった。

当時私は国立大学の図書館長をしていた関係から、欧米の大学図書館を視察する予定があったので、アメリカからヨーロッパに渡り、一応使命を果たしたが、序でに各地の銘酒を味

わい得たことは有難かった。中でもビールについていうならば、矢張りドイツで、特にミュンヘンで喝をいやしたのが一等であった。甘くもなく、にがくもなくスルスルと喉を通って、とても爽やかであった。本場のビールというものは、こうした味のものだそうで、帰国してからもこの味を忘れ難く、デパートで半ダース買って来て、入念に冷やして試みたが、ミュンヘンでの味はなかった。その後数年たって、一カ月間ほど琉球大学に出張講義をしに行った時、知人の琉大教授につれられて、那覇の米軍キャンプ内の食堂に入った。卓上には十種近くの世界のビールを並べ、どれでもお選び下さいというので、お義理もあつてまずアメリカのものを試みた後、またミュンヘンビールを取上げた。おいしかったが、矢張りあの時の味はなかった。酒はその産地で頂くのが、最もよろしいのである。

私は、飲酒に関して現代人のモラルを考える、という心算で筆を執つてみたのであるが、余談に流れて余白が無くなった。もともと凡下で飲み助の私には、そんなことを論ずる資格はなさそうだ。

古人は酒を天下の美禄といった。それは昔の武士の微禄とは違う。殊に現代には世界の美禄も少くない。それらを頂く

には、それにふさわしい現代のモラルやマナーも必要であろう。しかしそれは矢張り酒は薬であるという原点に立って考えるべきであろう。酒が薬であるからには、酒の性質・種類を知り、適量を適時に飲まねばならない。これを守らなければ、折角の良酒もしばしば毒薬となる。よく酒は百薬の長と



はじめに

「飲酒」は「インシュ」とよんでも、「オンジュ」とよんでも、内容としてお酒をいただくということに、なんの変りがあるはずはない。よみかたはいづれにせよ、私にとって飲酒は縁がないわけではないが、けっして上戸の機ではない。それなのにさらに飲酒について現代のモラルを考えろ、といういかめしい棒をあてがわれて、とまどっている。

お酒を頂けば頂くほど、気分はいよいよ爽快となり、興奮

いわれるが、それは生理的というよりも、酒は憂の玉帯などといわれるように精神的な薬なので、宴会などはこの妙薬なくしては始まらない。そして宴会が始まると、酒は公共性をもち、そこに深く現代のモラルが顧られてくるのである。

藤 堂 恭 俊

(仏教大学教授)

状態に陥って、日常の思考や行動の棒をはずすことが多い。少々のしくじりであれば、お酒のうえでのこととして、自他ともに許しあうのが、この世のならわしである。してみるとこの世は、お酒飲みには実に都合よくできているというほかない。しかしこのことを裏がえして考えるならば、お酒飲みは、お酒を飲んでいない人、飲めない人に、どんなに迷惑をかけ、被害を与えているかわからないのである。この辺に飲酒について、モラルを考えねばならない発端があるように思われる。

酔人にも人格がある

モラルとはいふまでもなく道徳のこと。『広辞苑』には、「人としてふみ行わねばならぬ理法と、これを実施にあらわす行為、即ち自己の行為または品性を、自己の良心乃至社会規範を以て律し、善及び正をなし、悪及び不正をなさぬこと」と、しるされている。しかしふりかえてよく考えてみると、お酒を頂くと興奮状態に陥り、平素の正常な状態であり得なくなる。してみると、飲酒者は、はたして自己の良心の命ずるままに行動したり、あるいは社会規範をもって自己を律することができるであろうか、と問いかけたくなる。正常な人にしてはじめて行い得るモラルを、正常さを失った飲酒者に、いくら強いても無駄ではなからうか。それほどに正常な知・情・意、あるいは思考や行動をみだし、失わしめるのは、お酒の精というほかない。

いくらお酒を頂いた上でのしくじりだといっても、「人としてふみ行わねばならぬ理法」に、反したことは到底許しやうがない。そのような時は、社会の規範にもとづいて、法の裁きをうけねばなるまい。ということは、たとい酔人といえども、その人の知・情・意、あるいは思想・行動を統一する人格を認めてのことである。酔人だからといって、せつかく

認められているみずからの人格を、そこなわず、あだおろそかにしないで、むしろ認められていることをありがたく受けとって、よりよい人格の形成につとめることを、念頭におくことが望まれる。

今法然、現代の釈尊とも仰がれた山崎弁栄聖者は、「不飲酒」について、「酔うことなかれ、肉と我とに」と、肉欲・我欲に酔いつぶれることを戒めている。酔うことは飲酒だけにかぎらない。酔いは飲酒によって代表されるが、酔いにはめざめがない。めざめのないところ、人格の核をよりよく育てることはおぼつかない。よりよい人格の形成という方向で、飲酒のモラルは考えらるべきでなからうか。

「めざめ」には障害となる

私たち仏教徒には、仏教徒としての「飲酒」にたいするモラルが示されている。菩薩戒本とか、菩薩戒經と呼ばれる『梵網經』第二に説く十重波羅夷戒の第五に、酤酒生罪（酤酒戒）が示されている。すなわち

なんじ仏子よ。みずから酒を酤り、人を教えて酒を酤らしめるならば、酤酒の因、酤酒の縁、酤酒の法、酤酒の業がある。一切の酒を酤ることを得ざれ。これは、酒は罪を起す因縁である。しかも菩薩はまさに一切衆生の明

達の慧を生ぜしむべきに、しかるに反って一切衆生に顛倒の心を生ぜしめるならば、これは菩薩の波羅夷罪である。

と、いうのである。お酒を金銭で売る（酤）ことをみずから行い、他をして行わしめるについて、在家と出家とにかかわらず、「顛倒の心を生ぜしめ」、「罪を起す因縁」となるからという理由で、これを最重罪と規定している。

この戒本の文中、その書きだしに「なんじ仏子よ」と呼びかけ、さらに「菩薩」という普通名詞を二度もしるしていることに注目せられる。出家・在家の別なく、仏道を歩む人はすべて「仏子」であり、「菩薩」であることを、自他ともに認めるのが大乘である。したがって彼らの思想・行動は、菩薩精神でつらぬかれていくわけである。菩薩の志向は、つねに自分以外のすべての人たちがめざめの生活に入ることに向けられている。そのことは「衆生は無辺なれども、誓って度せんことを願う」という「四弘誓願」の第一誓願に表明されている。このように自分のことよりも、他人のことを優先して念頭におくのが菩薩であり、その度生、利他の誓願をまっとうするために「煩惱は無数なれども誓って断ぜんことを願う。法門は無尽なれども、誓って学せんことを願う。仏道は無上なれども、誓って成ぜんことを願う」と、みずからを養

うのである。

この「四弘誓願」は自他一体感のあらわれであり、度生・利他のはたらきには、さらさら報酬を望む意志がない。なぜならば、菩薩は空・無我に徹しているからである。ともかく菩薩が自分以外のすべての人にたいして、「顛倒の心を生ぜしめ」たり、「罪を起す因縁」を与えないために「酤酒」しないということは、すべての人をしてめざめの生活に生きる人に、生れかわらせようという意志を持つからである。したがって「酤酒」しないといことは売りおしみでもなく、飲酒を独占することでもなく、めざめの中核である智慧と、智慧を実現する過程に、障害の作用をなす「酒」を締めだすことを意図している。強いていうならば「酒」は、仏道を歩む者にとって雑縁として、しりぞけらるべきものであり、それを飲むことは一層慎む必要があるわけである。

ついでながら、「飲酒」について『梵網經』はこれを四十八輕戒の第二にあげている。

なんじ仏子よ。ことさらに酒を飲めば、しかも酒の過失を生ずること無量である。もし自身の手から酒器を過して、人に与えて酒を飲ませるすら（その報いとして）五百世まで手がなくなる。いかに況んや自から飲む（べきでない）。一切の人を教えて飲ましめ、【および一切衆生

に酒を飲みしめることを得ず。況んや自から酒を飲むべき(でない)。もしことさらに自から飲み、人を教えて飲ませば、軽垢罪を犯す。

と、しるされている。

世のならいならば

大乘菩薩の上にみられる「酤酒」と「飲酒」にたいする態度はさることながら、わたくしのようなお酒に弱い者は、その雄しさに圧倒されそうである。かりに菩薩のごとくあらねばならぬと力んでみても、所詮画餅にしか過ぎない。わたくしはそのような意気地なしであり、菩薩のようにあるべしと強いられただけで、息ずまるような腰ぬけである。「飲酒」にかぎったことなく、理想と現実とがかわらないのは、わたくしだけだろうか。そのような私でも、宗祖法然上人のみ跡を慕い倣って、称名を尊び声相次をモットーとしている。

念仏者のすべてが範と仰ぐ法然上人は、『一百四十五箇条問答』のなかで、お酒を薬として認められていることが確認される。すなわち。

酒のいみ(忌)、七日と申候はまことにて候か。

答。さにて候。されどもやまひには、ゆるされて候。

と、いうのがそれである(第112問答)。さらに、

さけのむは、つみにて候か。

答。まことには、のむべくもなけれども、この世のなら

ひ

と、仰せになっている第57問答)。

「まことには、のむべくもな」という建前を表明しながらも、建前にふみとどまらずに「この世のならひ」として、袈を脱いで飲酒を肯定されているのである。わたくしはこのお詞に心ひかれる。はなはだ身勝手といわれてもいたしかたないが、それだけで心ひかれるのではない。このおらかなお気持ち、味噌の味噌くさくないのが好まれてならない。このような心持ちは、どこから湧いてくるのだろうか。私もさらにありたいと思っているから、機会あるごとに考えさせらるのである。

称名の一行に生涯を明け暮れ給うた法然上人が、こともあらうに飲酒をお勧めになっている、と受けとっているのではない。「まことには、のむべくもな」いのである。上人にとって生活や行動のありかたは、「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすべし」という一言につきる。してみると、お酒を飲むとか、飲まないとかいうことにこだわって、肝心の称名念仏をおろそかにしてはならないのである。称名の一行に安住して、微動だにしなければこそ、こだわりがなくな

るわけであり、それでこそ飲酒につまずいたり、しくじったりすることを稀とし得るのである。酒気を内に催しながらも、いともげにげにしき念仏者ぶるふるまいこそ、いましめらるべきであり、といって馬鹿正直に、内なる酒気を遠慮も、慎みをも忘れて外にあらわしだせ、というのでもない。称名の一行に安住することが生活、行動の中心となっていれば、飲酒という振りがいくら下にさがろうとも、もとにもどること必定なのである。飲酒と不飲酒にふりまわされていたのでは、所詮浮びようなしといわねばなるまい。



一昨年、軽井沢夏期大学で酒の権威、坂口謹一郎博士（東大名誉教授）の「酒の話」を聴いた時

「酒は大河のようにあってもよろしいし、又、笹の葉に宿る朝露のようなものにも、深い味わいがあるものです。」

と云われた時、私の喉がグイと鳴った。

むすび

「飲酒」について筆をはこんでいる内に、いつしか酒氣にあてられて、論旨おぼつかないことになりはてしまつた。酔氣のいたすところか、わたくしには、モラルはあたかも枠がためのように、外から規制されるべきでなく、むしろ内なるものの発動によってまっとうされると覚える次第である。

大元良成

（東京高輪道往寺住職）

丁度その頃、私はビールス性肝炎の後遺症で禁酒禁酒状態であつたが、いづれは若い頃のように大河の如くまでは行かなくても朝露の一滴ぐらゐは味えるのではないかと、ひそかな期待を持っていた。処が昨春秋、結婚披露宴で司会をした時、喉が乾いておひらき直前氷の溶けたウィスキーの水わり

をグイ——と一杯飲みほして帰宅すると心搏が三百五十ぐらい、血圧が四十二・三程度になり救急車で入院、電気ショック（俗にドーン）の治療を受け退院時医師より「命と引換えならば……」と、宣告され遂に断酒の止むなみにいたった。時折交際上酒席に列席することがあるが、ジュースやサイダーを頼むように飲む姿は全くサマにもならないし切ないものである。

「この人は昔大酒豪家で、茶碗酒をうまそうに飲んだ人なんだ」と同席の友人等が慰めてくれるが

「アー、こちらがね……」と女共の嬌声を聞くと、

（チ） ショー 棺桶に入る前に、酒樽で湯灌してやるぞ！
と末練、たち切れないでいる。

止め くい煙草の味は忘れてしまったが、酒の味は止めて十数年経った現在でも明確におぼえている。忘却を誓いながら忘れぬ味覚の末練に『私の酒壺は空になったのだ』と自らに云きかせても、秋の夜長の一時は、やはりつらいものである。

どうも人間は嗅覚から来る記憶よりも、舌から直接にふれ味覚は忘れられないものらしい。そんな私が酒のモラルを語るのもどうかと思うが、昔の酒飲みが、忘れ得ぬ酒の味の痴話を通じて酒飲みのモラルを読者各位にお考え願えたら、思い筆を進めよう。

結論から先に云うと

『何んてつたって、酒を飲めるのは幸せですよ』と叫びたい。

酒と云えば先づ日本酒が浮んで来る。コクと云い、香と云い、色と云い、舌にとろ——と来る肌ざわりには、酒造家の心にふれる心地がする。灘の宮水が六甲山を背にし瀬戸海の水圧によって三方面からの導入された湧き水ではあるが、日本の氣候風土によって育くまれた酒心が一坤の盃によみがえって来る。昔の人は酒には仏の三十二相にも似た心が宿っていると云い心地よい酔い心を楽しんで来たものだ。俗称「モギリ」と云って樽から一升枴に移したひや酒をキューと一杯ひっかけ枴角に盛った浪の華を口にふくむと飲んだ酒の味が口一杯によみがえって来るのはひや酒の醍醐味であろう。銅壺や鉄瓶の湯の音を聴きながら人肌の燐油をチビチビやるのも日本酒である。どちらも一人で飲む酒である。酒の味を知る酒である。楽しむ酒である。若山牧水の歌に

しら玉の齒にしみ通る秋の夜の

酒は一人で飲むべかりけれ、

とあるが、言葉にならない言葉をかみしめながらの独居の酒である。でもこうなるまでは大変で、先づ賑やかな酒の味を知らねばならない。

にぎやかな酒、それは対話の酒とも云える。飲み仲間と飲む酒、これは酒を味う酒でなく酒飲みの楽しさを味う酒である。酒宴の明るさと楽しさを分か合う酒である。この酒の楽しさを一層増してくれるものは対話の心得である。解逅の慶びが酒くみかわす互譲の思いやりによつてはじめて酒宴の楽しみが生れる。よく見うけるあたりかまわずの喧騒さにはこの楽しみは生れない。又一人よがりの経験談や自慢話ぐらいこの楽しみを奪うものはない。下谷の鍵屋（居酒屋）で土間の空樽が満員の時など主人の居間まで通されて整理ダンスや鏡台の前で知らない人と膝つき合せて酒を飲んだことがある。ふと耳を澄すと土間に架っている真黒に煤けた大時計のゆっくり動く振子の音が聞えてくるぐらいが酒飲みの場所である。トコロテンを着に酒の甘さを教えてくれたこの店の親爺の心意気が酒心にも通じような気がする。この店も数年前道路拡張のため取りはらいになつて店先の腹簀もなくなつてしまつた。

最近ではスナックやバーの看板が多くなり洋酒党がふえている。洋酒の古酒の美味と香りも、ストリートどころか一時はやつたオンザロックも影をひそめ専ら水わりである。古酒を楽しむストリート党はやはり独居の酒なのか。水わり党は洋酒が持っている本来の味をぶちこわしてしまうのだが。各自

が自分の嗜好に合せて濃度を調節して飲め誰でもが楽しめる簡便な方法が水わりにあるのかも知れない。水わり党が压えた。女性も多い。女性が女わりとすりながらの女らしさのあふれる風情はよい水わりである。女らしさの風情は恥らい（羞恥心）から始まる。戦後コンテストばやりの頃、某ビール会社がビール飲みコンテストを催した。物好きで私も見物に行つた。予戦を勝ちぬいた数人の豪者が残つていよいよ決勝ラウンドになつた。中に一人の女性がいた。ヨイドンで巨牀の男性は一勢に大ジョッキの把手を鷲づかみグイグイと干して行く、女性はそつと把手の中に掌をさし入れて楚々たる感じで支え飲みはじめた。そこまでは良かった。飲む程に私は驚怖と同時に失望した。洗面所の排水口に吸い込まれる水のように女性の口の中にスウーと流れ込んで行く。飲むのではない。流し込むのだ。どんどん空ジョッキが列んだ。男性達はジョッキを空にすると大きく呼吸をするが彼女は最初と同じくスウーと流す。規定の時刻が来た。

空ジョッキの数をかぞえた。彼女が一番多い。優勝である。周囲から驚嘆のためいきともつかぬ歓声が上がつた。彼女はキョートンと無表情である。彼女の心は眼前の空ジョッキのように虚構であるのか。この時から私は女の飲んべーはきらいになつた。昔銀座尾張町（今の四丁目）の角のビヤホー

ルで冬の寒い夕、ガンガン燃える真赤なストーブの前でガタガタ震えながら飲んだビールも味い深い、暑い夏の夕刻「あら、私、酔ったかしら……」と目のふちをピンク色にしてビヤホールを出て来る勤務婦りのOL嬢の恥らいにむしろ女性の酒飲みらしさを感じる。女性が酒を飲む時は女性特有の恥らいを忘れないでほしい。酒宴にはこの恥らいがよい意味での雰囲気をつくり出してくれるのだから無闇に口説いたり舐にふれてはいけない。むしろ彼女のほろ酔い心地をそつと大切に上げてあげるのがエチケットではないだろうか。

今年の夏も軽井沢には多数の若者が来ていて、旧北国街道との分岐点の「分去れ」の旧に蹟は数多くの自転車が行列しているが、一歩左側の旧中仙道に入ると旧街道の物静かな家並が続く。この中仙道宿場の面影を今も伝える望月町に銘酒「大吉野」の酒蔵がある。元禄二年の創業である。この酒蔵に先祖伝来の木箱があり、その箱の中に古伊万里焼の瓢箪型の一升入りの酒壺が固く漆詰め、栓をしたまま保存されていた。先祖の市郎右衛門が創業の酒を入れて「子々孫々に至るまで必ず開封すべからず」といい伝えて来た壺である。正に三百年近い年月この酒蔵に秘蔵されていたのであるが、昭和四年のクリスマススイヴにN・H・Kテレビの放影裡に坂口博士立会のもとに開封した。この時の模様を坂口博士は

「実にふくよかな香りが忽ち室内に充ちました。中味は大部減っていましたが、褐色をした濁り酒が淀んで、味は酸はくなっていました、アルコール量は二四%もありました」と語って呉れたのを思い出した。その時同博士はさらに言葉を続けて、

「私はこの壺の栓に興味をもって調べました。この栓は桐でした。桐を漆詰めにした栓ですのでこれなら本当に密封出来ると感心をし、この酒造家の酒心を知りました」と述懐された

今私は禁酒ではない断酒を誓わされた。未だにその味を忘れ得ぬ未練心に密封の栓をしなくてはならない。

その栓は何だろうか。
五戒中の不飲酒戒の教えであらうか。

新刊 地藏菩薩の理解

小野田俊夫著

発行所

神戸市長田区宮川町二一
一
浄土宗 光 堂 寺



に	こ
聞	法
く	語

法然上人の人と生活(十)

配流の旅を「朝恩」と感じて

宝田正道

建永二年(一二〇七)二月二十八日付の宣下状によると、法然上人は、俗名藤井の元彦(一説に源元彦)という名で流罪に処せられることになった。追捕の検非違使は宗府生久経、領送使は左衛門の府生清原武次、その他に数人の従者ということである。上人の勸化を仰ぐ道俗貴賤の人々が、嘆き悲しんだことはいまでもないが、このとき、高足の法蓮房信空が「一向専修の興行とどむべきよしを奏したまひて、内々御化導有るべくや侍らん」とひそかに勧告したのに対して、答えられた上人の言葉は、次のごとく、あまりにも有名である。

流刑さらにうらみとすべからず。(中略)念

仏の興行、洛陽にして年久し。辺鄙におもむきて田夫野人をすすめん事、年来の本意なり。しかれども時いたらずして、素意いまだはたさず。いま事の縁によりて年来の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいふべし。

『勸伝』三十三

この法語によるかぎり、上人が平素から都の人々ばかりではなく、広く地方の旅に出て辺地の庶民にこそ専修念仏の一行を勧めたい、と考えられていたことがよくわかる。すなわち、上人はこの配流ということを、地方教

化に絶好のチャンスと受取られ、これを「朝恩」とまで感じとられているのである。そして、「此法の弘通は、人はとどめんとすとも、法さらにとどまるべからず」という固い信念のもとに、「なんぞ世間の機嫌をはばかりて、経釈の素意をかくすべきや」と、熱烈極まる堂々たる所信を公にしていられるのである。だからこそ、同じく弟子の西阿弥陀仏が推参して上人の口止めをしようとした際、「われたとえ死刑に行はるとも、この事いはずはあるべからず」という、至誠と情熱にあふれた力強い言句もおのずから飛び出してくるのである。

ともあれ、こうして三月十六日、花洛を出て夷境への旅路につかれるのであるが、ふだん馬や車や輿にも乗らず、もっぱら金剛草履で歩くことを例とせられた上人がこのときばかりは、老齢と長途の旅を慮った周囲の勧めで、信濃国のご家人角張りの成阿弥陀仏が棟梁となつて担ぐ力者の輿に乗られ、最後の別れといつて輿に従う六十余人の弟子たち一行とともに、下鳥羽の一念寺に入られる。そして、名残りを惜しむ幾千人という人々に向つて、次のように諫められたのである。

駅路はこれ大聖の行く所也。漢家には一行阿

闍梨、日域には役優婆塞。謫居は又権化のすむ所也。震旦には白楽天、吾朝には菅丞相なり。在纏出纏みな火宅なり、真諦俗諦しかしながら水駅なり。

〔勅伝〕三十四

さて、淀の川舟は下鳥羽の南の門から出る。『九卷伝六上』によれば、二尊院の正信房湛空公全も、同じ日に西国へ流されたが、上人の舟より一足先に出るというので残念がり、しばらくの間待ってもらつて上人の舟に乗り移り、上人の膝に頭を埋めてしばし慟哭の聲が天に響くくらいであつたというが、上人は驚かれる様子もなく、ただ念仏していられたという。湛空も一目上人にお会いでき、泣きだけ泣いたので、あきらめて、元の舟に急がされるとそのまま自分の舟に帰つたという。あるいは同船したのではないか、という説もあるが判然としない。

上人を乗せた舟は、まず浪花をすぎて神崎（尼崎）に着く。ここで上人は、舟に近寄ってきた五人の遊女を教化され、そのゆかりの地が珠光山如来院遍照寺（第四番）ということになっている。ついで摂津国の経の島に着かれたが、『十卷伝』巻八には、この間の事情をいろいろ

こまかく描写し、あまつさえ三月十八日から二十七（一説二十一日）まで逗留されたとある。また、神戸の灘駅近くにある裁松山阿弥陀寺（番外）の寺伝によれば、この頃風波荒く、上人の舟は脇の浜へ避難してしばらく滞在を余儀なくされた、ともいわれている。一方、神戸には、解脱上人開基の万年山千僧寺旧跡があり（第六番宗教法人元祖教舎、上人配流の途次、この寺に留錫されて源平の亡魂を弔い、自ら六字の名号を書いて石に刻まれた（名号石））ところであると伝えられている。

上人のような「流人」は、その取扱いが比較的ゆるやかであったと見えて、縄目の恥をかけられることのないのはもちろん、着いた先々でも、わりに自由な行動を許され、日程もある程度大目に見られていたらしい。とにかく、三月二十日前後には、まだ淡路島の手前であちこち立寄り、禁止条項かと思われた専修念仏の説法などもし放題であったことは、本人はもとより結縁の衆生にとってもありがたいことであった。

やがて、舟は播磨灘を西に進んで、瀬戸内海に入り、白砂青松の景色も美しい高砂の浦に着く。加古川の河口にのぞむこの地は、古くから漁夫の町として栄えたのであるが、したがって朝夕いろくずの命をとるすなごりを

業とする者が多かった。上人は、殺生罪を犯す漁夫でも南無阿弥陀仏と唱えれば仏の悲願に乗じて浄土に往生すべき旨を、ねんごろに教えられた。特にこの浦に住む八田治郎（部？）大夫という老夫婦は、その教をすなおに受取って昼は念仏しながら漁に励み、夜は二人とも声をあげて徹夜で念仏することが多かったというので、後に彼らが立派に正念往生したことを聞かれた上人は、次のように感慨を漏らされた。

機類万品なれども、念仏すれば往生する現証なり。
（『勅伝』三十四）

この浦には、十輪寺（第三番）という寺が旧跡として残っており、老夫婦の霊を祀る石碑には、「願空浄海法子、乗空智海法尼」という銘が刻まれているということである。

ついで、海路を六里余り行くと、室の泊（室津）がある。ここでも、上人は、室君、友君その他多くの遊女を化益され、その信仰の厚いことを知って、後に正念往生した彼女らの話を伝え聞き、「しつらんしつらん」といわれたことも、有名な逸話となっている。当地の旧跡としては、浄運寺（新第三番）がある。

こうして舟が讃岐国塩飽島に着いたのは、三月二十六日のことである。土地の地頭である高階保遠入道西忍は上人を館に請じ入れ、薬湯を設けるやら美膳をととのえるやらして、さまざまに礼厚くもてなしたので、上人も大変喜んで、「極楽もかくやあるらんあらたのしとくまいらばや南無阿弥陀仏」と詠まれたという。また、「名利は生死のきづな、三途の鉄網にかかる、称名は往生の翼、九品の蓮台にのぼる」といわれたのもここの述懐だという(『弘願本』四)。

上人は、西忍に念仏の往生の道をこまかにさすけられたうえ、次のような法語を与えて、いましめておられる。同島の専称寺(番外)がその旧跡といわれている。

不軽大士の杖木瓦石をしのびて四衆の縁を結び給ひしがごとく、いかなるはかり事をめぐらしても、人をすすめて念仏せしめたまへ、あへて人のためには侍らぬぞ。

『勅伝』三十五

舟路はここから四国の丸亀までで終る。丸亀に上陸された上人は、これから陸路坂出に入り普通寺を経て現在の香川県仲多郡満濃町一体の、いわゆる小松の庄に着き

ここに止住されることになった。現在仏生山町(高松市)にある法然寺(第二番)は、当時生福寺、真福寺、清福寺という三福寺の中から生福寺を移したもので、ここより南に、有名な金毘羅(象頭山)大権現や買田の法然堂、東には羽間の西念寺などがある。いずれも上人の旧跡として、残されている。

そもそも上人は、はじめ土佐国まで配流されることになってしたが、上人に帰仰の厚かった九条兼実が、土佐は余りに遠い、せめて自分の所領である讃岐に止めるように運動した結果、上人はこの小松の庄を謫居の地として住み馴染むことができたのである。しかし、皮肉にも、上人を配流の旅に送って以来、「今度の勅勘を申ゆるさずして、謫所へうつられぬる事、生きて世にある甲斐なきに似たり」と心を悩ますことひとしおで、日來の不食はますます重く、今生のうらみこの事にあり、と嘆き嘆き四月五日、五十八歳にしてついに他界してしまうのである。折しも上人が讃岐へ着くか着かれたかの頃である。本人も辛く口惜しかったであろうが、生前いろいろと自分のために便宜を図ってくれた兼実の死を聞いて、上人の悲嘆はどんなだったであろうか。恐らく長途の旅の疲れに加えてこの悲報は、老齢の上人を一層がっ

くりとさせたことであらう。

しかし、ともかく上人は、この小松の庄を中心としてあるいは善通寺（法然堂）詣でその他で教化導の日々を送られたものと思われる。なお、生福寺が高松へ移った後には、西念寺（羽間）が建てられたが、上人入滅の後、崇徳上皇五十回忌に際して、正信房湛空が当国白峯寺に下向した折、ここに参詣して、奉持していた上人の御舍利を納め、供養の宝塔を築いた、という話が伝わっている。建永二年（改元して承元元年という）十二月八日、上人の流罪は一応赦免ということになる。

旅路をいれても僅々九カ月余り、それも兼実のはからいで讃岐に配所の生活をつづけて勅免の声を聞いた上人は、再び海路をとって京へ向われることになった。しかし、畿内に止められて洛中への往還はまだ許されない。上人は、仕方なく、摂津の勝尾寺に止住されることになる。この間、海が荒れて紀州の加多の油生浜や大川村（海南市）に漂着された、という伝説がある。その旧跡として報恩講寺（第八番）や法然寺（神野々）などが挙げられているが、いつ、どの辺で暴風雨に遭われたかなどの詳細は明らかでない。そして和歌山から陸路か海路か、これまた不詳のまま、上人は摂津へ向われたことになっている。

応頂山菩提院勝尾寺（第五番）では、二階堂に住居を与えられ、すでに七十六歳の春を迎えても、京への往還は許されなかったで、ここを最期の地と思い定めていられたらしく、その心境は、「柴の戸にあけくれかかる白雲をいつむらさきの雲にみなさん」という一首によく現れている。上人は、ここで住僧の衣が粗末で一切経も備えてなかったことを気の毒に思われ、信空に命じて装束十五具と自分の一切経を取り寄せて寄進された。そして久しぶりに聖堂を呼んで唱導を頼んだり、訪ねてくる弟子を迎えたりの日を過ぎたのである。そして四年の歳月を閲した建暦元年（一二二一）十一月十七日、ついに花洛に帰ってよいとの宣下を賜ったのである。

上人は、こうして十一月二十日、久しぶりに都の土を踏み、慈円の好意で大谷の禪房に迎え入れられたのである。ときに齢七十九歳であった。

以上、旧跡と称するところを辿りつつ、「年来の本意」をとげた上人の旅路の末を訪ねたのであるが、はからざるこの巡教のおかげで、念仏の声は瀬戸内から四国の地にまで広がり、二祖の九州、三祖の関東と相俟ってやがて日本全土に浄土宗の発展する基盤が打建てられてゆくのである。



ハワイに生きる △上▽

—日 系 人 社 会 史—

新 保 義 道

一 序

仏教がハワイへ伝来したのは、殆んどが仏教徒たる日本人の移民と同時にといえると思う。正式の教師もなしに持ち込まれたる仏教の種子が、開教使の来布、寺院教会の建立等の縁を得て今日のハワイの仏教が育ったのである。ここでこの仏教がどのような土壌の中で成長して来たかを考えてみることにする。

一八二〇年（文政三年）米国伝道会社派第一回宣教師団十七名が来布、布教、文教と併せ近代農耕法を教え、甘蔗栽培も漸く確定、一八三五年（天保六年）カワイ島コロアに最初のプランテーション、コロア製糖会社が設立され、次々と各

島に製糖会社が設立されたのであるが、人口の減少と土着人の怠惰、労働不適のため労力が不足し砂糖業は遅々として進まなかった。

一八五一年（嘉永四年）外国人移民の元祖支那人苦力を移入、一八五九年南洋土民少数を移入したが、特に中国人は頑固で排他的、農耕に不適格であったので、日本人を求めるようになり元年者の来布となったのである。

最初の日本人移民の来布は明治元年（一八六八年）で今日まで百有余年の移民の歴史を持つことになるが、これを一言で言えば「差別」「誤解」「偏見」「酷使」の歴史といえよう。一世のバイオニア達はこれらの偏見と闘い、酷使に耐え抜き、食うや食わずの生活の中から、ひたすら子女の教育に意

を注いだ結果今日の輝しい日系人社会が築かれたのであつて、換言すれば「苦闘の歴史」ともいえるよう。

読者の理解を容易にするため、日本人移民時代区分を参照して頂けば幸いです。

ハワイ日本移民時代区分「下段（一）内は日系市民関係」	一、漂流民時代 一二七〇年（文永七年）—一八六七年（慶応三年）
二、元年者時代 （出稼ぎ前期時代） 一八六八年（明治元年）—一八八四年（明治一七年） 元年者一五三名が最初の移民として来布す 男一四六 女五 子供二	三、官約移民時代 （出稼ぎ時代） 一八八五年（明治一八年）—一八九三年（明治二六年） 官約移民二九〇〇六九名 男二三、二七〇 女五、七九
四、私約移民時代 （出稼ぎ時代） 一八九四年（明治二七年）—一八九九年（明治三二年） 私約移民二〇、二〇八名 （日系市民初期時代）	五、自由移民時代 （暫定的定住時代） 一九〇〇年（明治三三年）—一九〇七年（明治四〇年） 自由移民六八、三二六名 （日系市民初期時代）
六、呼寄移民時代 （定住時代） 一九〇八年（明治四一年）—一九二三年（大正十二年） 呼寄移民六二、二七七名 男二六 女三〇、六二三 子供五、〇五一 （教育振興時代）	

七、移民禁止時代
（永住土着時代）
一九二四年（大正一三年）—一九四六年（昭和二年）
（躍進発展時代）

八、割当移民時代
（帰化時代）
一九四七年（昭和二年）—一九六五年（昭和四〇年）
軍人花嫁及び少数の割当移民
（政官界進出時代）

九、新移民法時代
一九六六年（正式には一九六八年）以降

二 元年者時代（出稼ぎ前期時代）

元年者と呼ばれる一五三名の第一回移民が明治元年六月十日九日ホノルル港着、すぐに彼等は八人、十五人、二十人と言葉も通じないカワイ、マウイ、オアフの各耕地に配分された。賃金一ヶ月四ドル、三年契約の彼等を待ちうけていたのは炎天下の不慣れな十二時間労働、時間中は一服休むことも許されず、少し怠けているとルナ（小頭）に鞭で打たれ、少し位の体の不調は休業の理由にならなかった。このような訳で苦情百出、紛争も絶えず、暑さと失望の余り自殺する者さえ出たといわれている。翌年には日本より使節が来布して労働条件の改善の取りきめがあったが、虐待は依然として続いた。資本と権力の万能時代にあって日本人労働者が、屈辱と虐待に対して爆発したのがウルバラクア事件であった。

○ ウルバラクア事件——明治七年（一八七四年）五月マ

ウイ島ルウバラクア耕地で元年者労働者二十余人が、平素からの虐待を怒って大ルナ（総監督）を半死半生にした集団暴行事件で、翌日は裁判となったが、当時の耕地裁判は耕主が裁判長、大ルナが検事、会計が書記という裁判であるため、ラハイナの政府の裁判所に訴えホノルルの裁判によって全員有罪となった。

最初の移民は元年者だけに終り明治十七年末で、元年者、漂着者、二世を入れて一六人が在住していた。

三 官約移民及び私約移民時代（出稼ぎ時代）

便宜上両時代を同時に取扱うが、この時代十五年は両国政府間の契約引続いて民間会社取扱いによる移民時代で、三年契約で募集されたもので広島、山口両県民が多かった。

広島県知事告諭（明治二十六年）の一部

広島県民布哇出稼者に告ぐ、茲に出稼者は最愛なる父母妻子に離れ、三千里の波濤を踏え遠く彼の国に赴くものにして、其の目的は皆金銭を儲蓄し他日故郷に帰り、安穩に世を渡らんとするに外ならず、今この金銭を得んと欲せば専ら品行を方正に、身体を健康にし、日本臣民たることを忘れず、能く彼の国の規則を遵守せよ……

と、あるように、日本人移民は腰かけ出稼ぎで浮動性が多か

った。三年の契約が満了すると極く少数の者は小金をためて故郷に錦を飾ったが、大多数の者は所期の貯蓄が出来ずそのまま耕地に止まり、営々として苦しい労働に明け暮れて小金を貯えることにきゆうきゆうとし、金銭の為には恥も外聞もあえて顧みようとせず、内的には飲酒、ばくち、婦女売買、売笑、刃傷と生活が荒さび、外的には依然として人種差別、虐待にあえいでいた。

当時の日本人が如何に無力で軽視され、白人社会から不公平な扱いを受けていたかを示すものとして、次の事件が起った。

○ 後藤潤私刑事件——一回船の移民ながら英語も出来、労働者の裁判の時には公平な通訳をしていたので、横暴な白人より憎まれ、邪魔者にされていた後藤潤が、明治二十二年（一八八九年）四肢を縛られ電柱に吊されて絞殺された事件である。当局は例によって犯人探索に活動もしないの

で、日本人移民局監督官の力によって犯人を逮捕し、裁判の結果一応は懲役になったものの、何時の間にか大陸に逃げてしまっていた。

その外一八九一—二年頃マウイ島オロワル耕地では、ささいな争いから日本人労働者が火の中に押し倒されて焼殺されたり、病気で休ませず耕地雇いの巡査（キャンプ巡査とい

う)と通弁が出向いて罰金と裁判費を課する等、無法で苛酷な取扱いが多かった。

このような差別待遇、虐待に対し全島各地でストライキが続発したが、人種問題を利用し、他人種をストライキ破りに利用されたので何れも成功しなかったのである。

四 自由移民時代(暫定的定住時代)

一九〇〇年(明治三十三年)にハワイがアメリカの属領となつてから、契約移民が禁止され、これ以来自費による移民時代とはなつたが、「送金と帰郷」という目標の下に苦役を続けることは前時代と同様である。来る者、帰る者、他耕地へ移る者、よりよき収入を求めて大陸へ転航する者など、生活は不安定、人心の動揺は激しく、すべてを金銭本位で考え、行動し、女房さえ売る者があつた程で、交際にも生活にも少しの潤いもゆとりも無く、男女の数の不均衡により道徳も類隨的であつた。そこで労働者は男も女も多くは思うようにならぬ苦しさや悩みから、半ば投げやりのなやるせない気持になり、一日の苦役を終え長屋に帰って、ドブコクとホレホレ節で発散した。この時代の生活を「ホレホレ節的生活」と呼んでいる。

次にホレホレ節の歌詞を一部紹介すると、

○一回二回で帰らぬ者は

末はハワイの黍の肥

○行こうかメリケン帰るかジャパン

ここが思案のハワイ国

○雨が降りや寝るヨウ日和なら休む

空が曇れば酒を飲む

○旅行免状のヨウ裏書見たが

間夫をするなと書いぢやない

○条約切れるしヨウ頼母子や落ちた

国の手紙にや早よ戻れ

○頼母子落としてワヒネ(妻)を呼んで

人に取られてベソをかく

○あすはサンデーじゃ遊びにおいて

カネ(夫)はハナワイ(水仕事)

わしや家に

○三十五仙のホレホレ取るより

バケ(支那人)さんとモイモイ(寝る)

すりゃアカヒカラ(一ドル)

仏教書道の夜明け

法隆寺釈迦三尊光背銘のこと

林 錦 洞

(書道家)

日本に仏教が伝わり、民間にその教えが浸透、定着するまでには、幾多の変遷もあったことだろうし、定着普及せしめた先輩大徳方の努力は大変なものだと想像するのである。

物部中臣等の排仏保守派と進歩的な蘇我氏の崇仏派との政争、そして聖徳太子という不世出な政治力と仏教信奉によって仏教は国の仏法として興隆を極めてゆくわけである。

聖徳太子は蘇我氏等崇仏派と共に主導権を握ることになったが、その時の祈願に四天王像を刻み一字を建立して安置したのが四天王寺の起りと言われている。何時の頃からか、この四天王寺の西大門を通して落日を拝むことは、極楽の東の

門と信じられ、重文の石鳥居も現存するくらいであるが、一般では観経日想観の信仰と共に、彼岸行事の起りとして見られているようである。望月仏教辞典によれば史実上は大同元年（八〇六）諸国の国分寺に令して金剛般若経を読誦せしめたのが最も古い記事とされていると言う。

聖徳太子の法華義疏は太子の仏教帰依の深さを物語ると共に他面我が国現存最古の肉筆書として、日本書道の夜明けを告げたものであり、その文化的書芸術上の価値は大きい。法華義疏のことは、また機を見て書くこととして、今回は太子や推古帝の創建になる法隆寺の金堂釈迦三尊光背の銘文について書いてみようと思う。太子肉筆の法華義疏が現存最古とすれば、この釈迦三尊光背銘文も金石文としては最古のものとして文化史上の意義も大きいのである。

法隆寺は法相宗から現在聖徳宗として独立しているが、七代寺の一名刹であり、推古帝の十五年（六〇七）の創建とされており、寺中西院の代表的な金堂に、釈迦三尊が安置されその光背に一行十四字十四行、全文百九十六字、三四センチ弱の大きさの銘文があるわけである。唐代文化影響下に、この銘文は六朝風な謹厳且つ古樸な味わいの書であり、各字の表現も幾分ふくらみをおびて、俯仰向背の造型も、抑揚変化と

相俟つて、誠に最古の金石文としての書価値を誇るに足るものである。刻法は陰刻で凹に掘り込まれていて、克明丹念なもので、本文の謹嚴と共に、敬虔な刻者の祈りに似た心情が見えるようだ。

「法興三十一年辛巳の歳、鬼前太后「聖德太子母君」が崩じ、翌年正月二十二日太子が病に臥し、太子妃膳姫も看病疲れて倒れられたので、太子と等身の釈迦像を造り仏に献ずるから病を癒し長寿を保たせ給え。若し定まった業で、此の世を去るのならば浄土に往生して妙果を得させ給え——と発願するものである。

然るに二月二十一日膳姫は世を去り翌二月二十二日には太子も崩じた。癸未の年三月に初めの発願の如く、釈迦像及侍と莊嚴具を造り献じます。この追善に乗じて仏教の善知識は現世に安穩を得、生死解脱することでしょう。また太子初め母君・膳姫に追隨して三宝を興隆し、彼岸を共にするならば、六道輪廻の衆生も諸の苦しみを脱し太子共々菩提を得ることでしょう。司馬の鞍の首、止利仏師をしてこの尊像を造らしむ。」

大要このような意味の願文が刻されている句読訓点には從來異説もあるようだが、今は通説に従う。

ついでながら、この金堂の四天王像について言及しておき

たい。木像彩色の四天王像の中、多聞、広目二夫像の光背には銘文があり、広目天像には孝徳紀白雉元年（六五〇）詔勅により千仏像を造った山口大口贊の刻文があるところから金堂二天造像記として著名である。楠木材で木彫金工の混合も注目されるところだが、私達にとって最も注目されるのは、広目天像の持つ筆である。巻子を左手に、右に筆を持ち、拇指と食指中指をそえた執筆法になっている。所謂単鉤法の筆の持ち方である。このことは、とりもなおさず、この当時写経を初めとして殆んどが単鉤法の執筆法であったことの証拠であり、この意味でも金堂四天王像は大変な意義を持っている。

像の高さは一米三十余、像容もこの時代特有のもので、誇張の少ない忿形、直立像形式的着衣、透彫鍍金などと興味深いものがある。

釈迦三尊光背銘は、敬虔な祈りに似て、亡き人を弔い菩提を成ぜんことを念じて、素朴に至心にそして切々たる心情がみなぎっている。千三百年法燈伝持された歴史の中に、今も変らぬ人の心が、純心にすがすがしく脈搏つて聞えて来る。

仏教東漸して程なく、日本に聞かれた彼岸行事、それと前後して日本書道の夜明けも訪れていたのである。今その生きた証しを、この釈迦三尊光背銘の中に見るのである。



釋教口續々法の衣に就いて
歌集

一附・高島式部小傳一

△第四回▽

石 畠 俊 徳

(大津市石山・浄光寺住職)

第 四 節

此外におくふかき事を存せば、二尊のあはれみにはづれ、
本願にもれ候べし。

続々法の衣

(高島刀美子詠)

二〇二 こ 濃き淡き色は変れど秋草の

露もらすべき法の種かは

二〇三 の 後と言はず今より申せお念仏の

勧めを今日の道ひらきにて

二〇四 ほ 蓬萊や千尋の底と頼みしも

後は法より行く道ぞなき

二〇五 か 限りある身に限りなき御仏の

恵みを誰か受けずぞ有るべき

二〇六 に ならみつめ三とせむかへに法の師も

みな此の道に引かんとてこそ

二〇七 お 御乳の身もうなあ少女も皆ひとつ

法の御国に引かんとぞおもへ

二〇八 く 暮ると明けと今幾かあらん此身ぞと

果なにつけて願ふ弥陀仏

二〇九 ふ 福祿寿皆のぞみこし道の外に

猶まされはここの法ぞかし

二一〇 か 限りなくとなり斯くなりなりかへる

元はひとつの法をつるぞや

二一一 き 聞く毎に驚かれつる入相の

かねてぞ思へ誘ふ時あり

二一二 こ 事も無く七十余り過してき

猶静かにも行んを頼む

二二三 と 兎もすれば遠ざかりゆく弥陀の影

常に願ひて誓ひ忘るな

二二四 を 遠ち近ちの知るも知らぬも先立ちて

行くや我れにもいつの暁

二二五 そ 若干の罪も報ひも白雪の

弥陀の御影に消ゆとこそ聞け

二二六 む 六つ百の五十の春にも咲みちて

猶法の花匂ふ庭かな

二二七 せ 堰きあへず涙に袂ぬらしつつ

深き恵みの吉水を汲む

二二八 は 果なくも賤の小田巻いとはるる

身を捨てて聞け法の一ふし

二一九 に 二なきものの不二のみ山に譬へても

猶あまりある法の道芝

二二〇 そ そこ爰と迷ひては入るはかなさよ

浮世を出る門も知らずで

二二一 む 無漏の山不二の烟も絶ゆる世に

猶胸の火は消さで有るべき

二二二 の のが来し唯一筋の山に住み

心にさけよ六の道芝

二二三 あ あらたなる御法は後の世ばかりか

称へばあはす此世ながらに

二二四 は 遙かなる山のあなたと思ひけり

称へば爰を去らぬ御影を

二二五 は 蓮台に救ひとられん誓ひこそ

何に譬へん尊とさと知れ

二二六 み 見ぬ所知らぬ国とな疑ひそ

唯一声に到る極楽

二二七 に 西の方願ふ心の池水に

開けば開く法の蓮は

二二八 は 蓮花清く開かん思ひ入り

深き御法の露を受く身は

二二九 つ 網でなほ又此の岸につなぐなよ

誓ひの船に乗り後る身を

二三〇

れ 礼拝を朝な夕なに畏くも

守る人こそ法にぞ有りける

二三一

ほ 朗らかに胸の丸窓あけたらば

やがて御法の影うつるなり

二三二

む 六ッ百の五十の春とふ吉水に

尊とき御影のうつる今日かな

二三三

く 苦しきは皆胸の火の燃ゆるこそ

心の水に今朝は消ゆらめ

二三四

わ わだつみの底まで到る法の影

たつの都も浮かぶとぞこそ

二三五

む 結ぼるる柳の枝に春風の

法に解かれて法になびけよ

二三六

に 握り出で開き合せて帰る手の

思へば法ぞたふとかりける

二三七

も 漏れぬかな其の九ツの品々も

法の恵みの露のはちす葉

二三八

れ 列立てて行くや数多の国司

夫れだに法にもる人なき

二三九

さ さし渡す誓ひの船に法の海

船子に身をば任せつつ行く

二四〇 ふ ふるしたる藤の衣も夫ながら

御手の糸にぞひかれ行かまし

二四一

ら 楽々と御手にひかれて行く時の

二四二

ふ 山づとにせよ数珠の玉の緒

補陀落の峯の雲より法の雨

二四三

へ しめしが原に降り渡しけん

距てなき御法の月の照らせるを

二四四

し 白すげの小笠も蓑も何にせん

引く時弥陀の影をかつぎて

(附) 式部の養生法

式部の遺影は、幸いなことに残っている。明治十三年九十
六賀の折のもので、当時の記録「高島志貴婦九十六賀筵ニ付
諸雜記」に

内山仁右衛門(神奈川県)、鎌田伝右衛門、石井伝右衛門、

岡村清三郎、池部清兵衛(以上伊勢)、早川久左衛門(岡崎)

の各氏に、祝品の返しの品々と共に贈っているのである。

村上正雄氏夫人の談というに、式部は色が黒く、常に化粧
をしていたが、白粉下か鼠色に見えたので、人呼んで鼠式部
といった由、夫人の母愛子(忠順の女)からの聞き伝えとし

諸共に霜をいたたく老らくに
千年をゆつれ志ら菊のはな

〈自 画 讃〉
(87歳作)



八十七姫式務

ておられる。

また次の如き記事もある。

萩原広道翁の歿せし時、遠近の門人、故旧多く会葬せり。式部も交遊の間柄をもて弔ひ来ぬ。人々、式部の来るを聞き、如何なる雅び女にかと、そなたに目を注げば、思ひきや顔ばせ黒く肥えて、いと鄙びたる老嫗ならむとは、皆々あきれ果てて言葉も得かはさでありしに、式部は毫もおめたる色なく、いと軽やかに一礼して座に就きぬ。時に式部七十九歳と。とにかく式部が所謂美人でなかったことは確からしいが、然し彼女は、人に好感を与える円満の相であつたらしい。

式部は終身健康で、悠々として天命を楽しむという型で、八十九十になつても、よく恋の歌を詠んで人を驚かし人を笑わせたという。維新の前には、屢々慷慨の志士と往来して幕吏にいらまれた事もあつた。西郷、木戸、大久保等の豪傑連がよく花柳の巷に遊ぶのを聞いて諷刺の歌を詠んで戒めたので、豪傑連も、「アノ婆さんにかかつては叶はん」とこぼしたという逸話もある。月照上人とは殊に交が深かつたという。

式部八十歳の時、「元治元年七月十九日に長州軍が京都を犯す。徳川慶喜は諸藩の兵を督して撃退す」という、所謂元

治甲子の兵乱に遭い、式部の京師丸太町通り堺町角の居宅の土蔵に大砲の弾丸が中りて爆破せし折も、式部は手元にありし筈一管と位牌を抑え危く一身は逃れたれど、惜しや自作の琵琶も秘蔵の楽器も歌集の原稿も、悉皆兵火に焼かれたという。式部はその夜は清水のほとりに古き友の住みけるを思い出て、たのみより暫く宿を借りぬ。次いで洛東錦織の旧居のはやくより人に借したれば、その妻やに先づ仮居して、やや硯とり出したるに猶夢の心地せられぬ。と記しながらその假、京都を離れて、備前に女流歌人松原三穂子を訪ね、次いで諸国を遊歴、慶応三年春に帰洛、その後は洛東錦織の里に住みついたのである。

式部の『養生記』更にその『遺言状』を見ると、正常なものと考え方と摂生のある生活態度が偲ばれる。

「養生記」は、京都府立図書館に蔵する。活版仮綴六枚の小冊子で、巻末に、「九十三嬢志貴婦年頭書」とある由にて、明治十年の執筆であり、内容は自らの体験による養生法を述べ、仙伝灸の広告をしたものである。

養生記

志貴婦 述

朝毎未明に起出、神仏先祖を拝み、朝茶を靈前に供して、茶碗半分計りなる茶に、梅干小さき一ツ入って飲んで、あと

の辛き汁を、目に塗つくり浸ますなり。生涯眼の患ひなし。霞み眼もなし。

飯は人々の一碗計りを、小鍋に粥にして、さいは古香の物、慣れ味増などにて、新味増、生味噌、生塩入りたる物あしく、新漬物、年久しく、食べず。生醬油沢山かけたる物食べず。急に地より出したるもの、茶の類、喘にさわる也。

大方、朝毎、餅二ツつ粥に入れて食べる也。夏だけは止めるなり。朝夕粥、昼は麦飯、四五十年、常に食べる也。

骨かはしき魚食べず。肴はかるき物少々食べる也。あび蛸の類、幾年も食べず。

朝毎、八時前後、足の三里に仙伝の灸、四五十年以来怠らずすゑる也。

女、惣たい、物の頭をとらず。物の初めをせず。

到来の物、神仏先祖に供へて後、食べる也。

昔より、大方出るに、道にては小便せず。旅などにて、よしなき時は、藪かげのかすかなる所にて、ちくる虫などにもよくよく断りいひて、するなり。

道の真中へつばけはかず。腐り繩にても、道にある物ふまぬ様。

朝な朝な、日天神山より御あがりの時、拝み、其陽氣を口あけて呑みこんでは、腹ふくらかし、三度四度もする也。十

たびもすれば、猶よろし。

道行くに、左へよりて行くなり。

夜も寝るに、北枕する、命なかし。西枕、福なり。東南あしし。病する也。家棟の通りに枕して、寝ず。疊の敷合、真通りに寝ず。

雪隠に入る時、必らず咳払ひして入るなり。我れ二十六歳の時、人に教へられて後、今に守る也。右の故、下かかりたる患ひ、一せつなし。

女は横に寝るといへど、成るだけ仰むいて寝て、手足を真直ぐに伸ばして、ゆるやかに息をして、是も腹をふくらしては、そつと息をし、十遍、二十遍すれば大養生なり。心しづめて、寝る也。枕は寿命、三寸はば四寸とて、同じくは三寸枕、寿命の薬なり。高き枕は、寝たる時、息一身めぐりて、ゆがみ出るゆへ、五臓六腑のため悪くし。三寸、但三寸五分迄にすれば、夜るの息直ぐに出づる故、平生大丈夫になるなり。

風呂に入る、冬別してぬるきはあしし。聊かあつき方にして入って、先づ一番に腋の下をよくあたため、夫れより腰をあたため、股ぐら前後よくよくあたため、腹をあたため、夫

れより顔を洗ふなり。其後、一身を入れる也。

但はや飯、はやくそ、早走りとて、此三ツおそく永き人は、世の間に合はず、天の御恵み少し。

煙草一服の間にも、天の一神、千里万里御とび行き玉ふを思へば、決して油断は出来ぬ也。さる人の居間に、一日なさざれば一日食はずと有りと也。油断しては遊び、用をせずして一日食ふは、天の物を奪ひ食ふに当る也。身の罪になりて、恐ろしき事也。自然、天の罪をうくる時は、何をもつて如何様に願ふ共、かなはぬ也。前々より常に心得て、常に慎まねばならぬなり。

右仙伝炙の日々の書付、御望みの御人、何時なりと呈上いたし候。怠らずすゆれば、九十歳迄請合の有。

我れ既に今年九十三になる也。今日まで杖もつかず、目も耳もかなり間に合ふなり。

歌に、

真心にこれまもりませもろの君

老ひず死なすの薬なりけり

九十三嫗志貴婦年頭書

(つづく)



念佛ひじり三國志

(六)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

平重衡によって東大寺、興福寺が焼き払われたころ、俊乘房重源は光明山の房中にいた。中国長安の光明寺を模した七重の塔の建立に打ちこんでいた。

ただし百二十八尺の高層建築は、技術面でゆき詰まっていた。四層までで、その上部が未完成なのである。

住蓮が明遍につれられて光明山の境内へ登ってきたとき、重源は未完の高塔を見上げて思案投げ首の恰好でただずんでいた。

毎日、こうした姿勢で思案しているようである。

「やはりこのう、唐国から工匠をつれて来すばなるまい」

明遍が近づく、いきなりこう声をかけた。まるで、昨日まで一緒に建築の相談をしてきた仲間に話かけるような調子であった。

「あなたに念仏の教えを受けた女が……」

と、住蓮はすぐ火事場での出来ごとを告げた。わが身を救ってくれた見知らぬ念仏信者の女人である。

重源は記憶してないらしい、彼としてはゆきずりに教化しているだけのようである。ただうなづくばかりで、その眼は未完の高塔から離れない。

「あなたは南無阿弥陀仏さまと号しておられるとか」

住蓮は話題を転じた。

「南無阿弥陀仏……うむ。それはな、寄進してくれた善男善

女に阿弥陀号を与えるために、自分で号したもののじゃよ」

「阿弥陀号とは」

「例えはここにいる明遍律師もこの七重の塔建立にはたいへん世話をよけておる。だから空の字を与えて、空阿弥陀仏じや」

「勝手につけられたので、わしは未だそんな名を号したおぼえはない」

と明遍は苦笑する。

重源が僧俗を問わず、阿弥陀号を与えたのは寿永二年のころからだと言伝には書いてある。東大寺復興のための勸進が開始されたからであろう。

自ら南無阿弥陀仏と号したのは文治二年の大原談義の結願時だと「源空上人私日記」にはあるが、もっと以前からのものらしい。

大方東大寺ノ俊東房ハ阿弥陀ノ化身ト云フコト出キテ、ワガ身ノ名ヲ南無阿弥陀仏ト名ノリテ、万人ニ一字ヲキテ、空アミダ仏、法アミダ仏ナド云フ名ヲ付ケルヲ、誠ニヤガテ我名ニシタル尼法師多カリ。ハテニ法然ガ弟子トテ、カカル事トモシ出タル。誠ニモ仏法ノ滅相疑イナシ

前号のあらすじ

治承四年（一一八〇）五月の源三位頼政の烽起に呼応するかのように、各地において源家による反平氏の叛乱が起っていた。木曾では義仲が、南紀では行家がすでに行動を起し、この年の八月、源家の嫡流源頼朝は伊豆石橋山で戦火を挙げ、敗れこそしたのが十月の平維盛との「富士川の対陣」では一挙に平家を敗走させたのであった。

こうした中で、平相国清盛は若將軍重衡に命を下して、そうした不満分子の元凶たる南都の僧兵を追討させた。治承四年の暮もおしつまつた十二月二十八日、ついに「南都の焼打ち」が行なわれ、大仏殿をはじめとする興福寺と東大寺の主要の堂宇は無残に焼け落ちた。この折の興福寺の僧兵十六騎衆の一方の侍大将である大乗院信国こそ、後の住蓮房重源であった。そして、幸いにも追手を逃れた信国は、東南院の明遍と知己を得て、俊乗房重源の居処を目指して焼炎のくすぶる南都をあとにした。

と、愚管抄で慈鎮は非難している。

東大寺の勸進をはじめた重源が、街で一人の陰陽師にこの阿弥陀号の札を手渡そうとしたことがあった。無論これと引き換えに寄進を受けるのである。

陰陽師はにべもなくこの阿弥陀号の札を付き返した。

「わしはこんなものは要らぬわい。喜んで地獄へ堕ちてゆ

く」

「そんなことを申すものではない。念仏の善業を積んでこそ。それにおぬしは地獄へ堕ちようと勝手だが、これを受けることで救われぬ他人が一人でも多く極楽へ往生するのじや」

「他人のことなど、わしの知ったことか」

陰陽師は激しい権幕で重源を突き放し、巷へ消えていった。

この陰陽師こそ、後になって法然の身边につかえ、かくれなき念仏者となった阿波ノ介だったのである。

仕度第一の俊乗房とうたわれた重源は、各地に寺院堂塔を復元し新築し、その資金は集めの手段として阿弥陀号を分け与え、念仏思想の普及に挺身していたのである。その作善は、大仏勧進以前よりおこわれていたようである。

「ところで重源どの、奈良の惨状をごらんになられたか」

明遍は訊いた。

「いや未だだ。人の話で聞いただけ。恐ろしうて見る気にもなれぬ」

破壊の跡なぞ身の毛もよだつと言いたげである。重源としては無理からぬ感情にちがいない。

「あの復興は、やはり五条大納言にその財力をあてさせるべ

きたらう。

と、明遍は政治的な提案をした。

「邦綱が……なぜ？」

「焼いたのが三位中条の重衡卿だからじゃ」

「なるほど聲どこの跡始末を舅がやるか」

「でないと、五条大納言も地獄ゆきになる」

俊乗房重源に東大寺復興、大仏鑄造の勧進上人となる宣言が下ったのは、この翌年、治承五年の八月である。しかし仕度第一の俊乗房としては、奈良の惨状をつぶさに聞いたこの時点、すでに胸に期するものがあつたはずである。

明遍はそこで、今日この光明山へ登ってきた用件を重源に切り出した。若き僧兵だった住蓮の身柄を托することである。

昨日からの短い接触で、明遍はこの若者が誠実で、勇気があり、かつ仏法を深く信じていることを見抜いたようである。重源のような行動的なひじりにつかえることが若者にふさわしいことだと判断した。

「なるほど、なかなか活気がありそうな男だ」

重源もとっくり観察したすえ、住蓮が光明山の房中に住むことを許した。

房中と言つても重源が起居しているのは、本房から遙かに

離れたところにある。未完の七重塔の普請小屋の一角を仕切
って住んでいた。当然、住蓮もそこに同居しなければならな
い。

「これを、まとうがいい」

光明山に起居しはじめると、重源は一枚の法衣をこの新弟
子に与えた。

漆黒の黒衣であった。

「とにかくわしのもとではな。法務儀式はいつさい無用じ
や。大工仕事ばかりじゃ。それには下手な色の法衣では汚こ
れが目立ってならぬ。黒ならば存分に仕事ができる」

と無難作に言つてのける俊乗房重源は、黒衣が何を意味し
ているのか、真意を知っていたのであろうか。

二

黒染めではない。漆黒の黒衣なのである。

今日でこそ黒衣は、修行服、ないし作務服として僧侶の基
本的な服飾のように考えられている。入門して、まだ位階を
もらえぬ僧はこれをまとうのが慣例である。

しかしこの平安末期まで、漆黒の黒衣は禁色だったのであ
る。

仏教が中国へ伝来したころ、儒教との混合もあって、法衣

に黒が用いられた。だが黒と墨とは厳然と色別されたもの
だ。

黒は白、青、赤の三原色と並んだ正色である。四神である
青青、白虎、朱雀、玄武の一神を表徴する。玄武の色であつ
た。方角としては北に位置し、北辰であつて不動の色彩であ
る。

だから黒衣をまとう者は僧侶の位階としては最高に位置し
た。

最高とは、この僧が政治に関与することを意味する。

北周の武帝のとき、「黒衣は次にきたるべし」と予言され、
武帝は黒衣をまとうことを禁じた。これを黄色に変色させ、
同時に仏教排斥の動きを活発にした。

黒衣の宰相――

そんな言葉もこれまでの高位の僧が政治を壟断してきた証
固であった。

黒衣にひきかえ墨染めの方は、最も低い僧階を意味する。

中国から伝来してきた仏教が、日本においてこの法衣の色
別を継承したのは当然だったと言える。平安初期の淳和期、
「令義解」には法服の色を木蘭、青碧、黄及び壤色と規定し
ている。

比叡山や高野山で用いられた墨染めは、前記した下位僧の

色であつて、決して漆黒の黒衣ではなかつた。

話は飛ぶが、後年になつて念仏ひじりたちが大同団結し、法然を祖師として新しき余派「浄土宗」を結成した。このとき念仏ひじりたちは黒衣をまとつたのである。

これをなじつた興福寺奏状には「黒衣」をなじつた文章は見あたらないが、これは「墨染め」の修行衣と考えたうえであろう。吾妻鑑によると正治二年五月十二日の項に、

羽林（將軍頼家のこと）念仏名僧等ヲ禁断セシメ給フ。コレ黒衣ヲ惡マシメ給フ故ト、云々。仍ツテ今日、件ノ僧等十四人ヲ召集メ、恩喚ニ応ゼシムト。然ル間、比企弥四郎仰ヲ奉ハリテ之ヲ相具シ、政所ノ橋辺ニ行キ向ヒ、袈裟ヲ剝ギ取り、之ヲ焼カル。見ル者堵ノ如シ。皆彈指セザルハナシ。僧ノ中ニ伊勢ノ称念トイフ者アリ。御使ノ前ニ進ミ申シテ云フ「俗ノ黒衣、各々同色トシテ用イ来ル所ナリ。何ゾ之ヲ禁ゼシメ給フ可ケン哉。凡ソ當時御政務ノ体ヲ案ズルニ、仏法世法、共ニ以テ滅亡ノ期ト謂フ可シ。称念ノ衣ニオイテハ更ニ焼ク可カラズ」而ルニ彼ノ分ノ衣ニ至リテハ其ノ火自ラ消ニテ焼ケズ。則チ之ヲ取ツテ元ノ如ク著テ逐電スト。

將軍頼家が黒衣の念仏者を憎んで断圧した記事が出ている。

伊勢の称念者が誰であつたかはわからない。しかし彼が所屬する念仏宗が、黒衣のユニフォームを着て、この服装から政治改革を意図した気概は十分にうかがわれる。鎌倉武士が恐れたのは、まさしくその黒衣が象徴する「政治色」だつたにちがいない。

ちなみにこの新しき念仏集団を「浄土宗」と名づけていたことは、同じ吾妻鑑の建久六年四月五日の記述にある。

畠山次部重忠が梶尾に明慧上人を訪れるくだりで、上人が勇者重忠の來訪を予知した洞察力をたたえるのが主文だが、二人の話の内容として、

浄土宗ノ法門ヲ談ジ、出離ノ要道ヲ承ハリ退出スト

紹介しているのである。

源頼朝が法然と親しかつたらしい記述は「高野春秋」の文治三年四月二十四日にちらりと覗いている。

重源法師、繼新別所蓮之交、赴鎌念、是依頼朝卿之手書到法然上人之許、上人是送重源也 所誦大仏殿

再興之器量被推挙故也

頼朝が大仏殿復興の大スポンサーとなり、法然上人にその仕事をゆだねようとし、法然の辞退から重源を推挙した事情をうかがえる資料である。重源は当時高野山にいたらしいが、蓮社谷を出て鎌倉へ出かけるのである。

頼朝と親しかった法然。その念仏宗をなぜ息子の頼家が断じたのか。そこに鎌倉源家の政治上の変転が見られる。頼家としては亡き頼朝が親しくした法然、及びその妻だった北条政子が信仰する専修念仏は憎悪一色で呪いたかったにちがいない。

それはともかく黒衣がいつのまにか僧侶法衣の基本みたいになってしまったのは、法然浄土宗がこの日本列島にくまなく教線を拡大したためである。

さて光明山に住みついた住蓮は、師の重源の日常に一つの秘事を発見した。

夕方になると、重源はいつもひとりで裏山へ登ってゆくのである。何しにゆくのであろうか。半刻ばかり戻ってこない。

ある日、住蓮はそつとそのあとをつけてみた。

光明山の裏山は草木の潤れた禿山だった。そこから下の谷

川へかけて砂漠のような山肌がつらなるのである。

重源は身を斜めにして、危っかしい足取りでこの山肌を降りてゆく。

谷川まで降りるのかと思ったら、途中でその姿が消えてしまった。

どうやら中腹に洞穴があつて、そこへもぐりこむのである。

高価な金銀でも秘蔵しているのではなからうか。

住蓮はあとを追ってみた。

浅い洞穴だった。その奥から重源が読経する声が洩れてきた。

秘事ではない。仏像でも安置してあるにちがいない。

住蓮は洞穴へはいりこむと、声をかけてみた。

「お前か」

ふり向いた重源を而上を狼狽の色が走った。

「何が祀つてあるのですか」

「これだよ」

と、重源は洞穴の奥を指へした。

粗末な土器の瓶が一個、棚のようになった壁に置いてあつた。

「何がはいっているのですか」

「なかが知りたいか」

＜洞穴の重源＞



「はい」

重源は瓶を抱きおろすと、その蓋を取り除いた。黒髪が見えた。人間の首がなまなましい形でおさめられてあった。

「これは誰方？」

「このお方か」

すでに腐色しかけた首に、重源はあらためて深々と黙礼した。

三

この五月末のことだったという。

夕暮れである。数騎の武者がこの光明山へ逃げこんできた。これを百騎に余る平家武者が追ってきて、一名を残して、みな山門下で殺されてしまった。

残った一騎はこの裏山に身をひそめたらしい。

平家の武者はそれに気づかず引揚げていった。

七重の塔の工事場から逃げた一騎の行く先に見当をつけた重源は、翌朝この斜面を下ってみた。

洞穴のなかで若い、上品な容貌の武者は端座していた。右胸から血が流れていた。矢を貫通されたあとである。出血が止まらず、彼の顔には生色がなかった。

「平氏の追つ手を逃がれはしたが、この傷では余命いくばくもない」

と、若武者はもの静かに語った。

「ご自害なされますか」

重源の言葉を、若武者はゆっくり首を振ってさえぎった。

「自害などするのは、その身卑しき武家どもの慣習である。

皇統を継ぐ者は自害なぞせぬものだ」

ここで重源は、はつとなった。

「三条の宮であらせられますか」

若者はうなずいた。

三条宮とは、後白河法皇の直嗣以仁王のとである。

後白河帝には表立った女御として三人の名前があげられる。源懿子がその第一で、二条帝の母親である。次が高倉三

位成子。その腹から出生したのがこの以仁王であり、また式

子内親王である三人目が平滋子で建春門院と呼ばれた。平清

盛の王室時子の妹で、高倉帝を生み、平家を背景に最もとき

めいた女御である。

三腹ながら成子の家系は悲劇の道をたどられる。以仁王

は元服時にも誰からも祝福されず、ひっそりと母方の生家で

これをあげたという。

その憤懣が平家追討の令旨となって爆発する。各地の源家

残党に令旨はつたえれた。しかし以仁王の挙兵は三年間早すぎた。いや半年と言いなおしてもいい。

治承四年が明けた翌年の二月、平清盛は不可解な熱病で世を去るのである。清盛の死後であったならば、と惜しまれもする。

ただし歴史は結果からは論じられない。無謀無策とも思われる以仁王の挙兵があったからこそ、またこれに同調した源三位頼政のロマンチズムが宇治川の戦いへ向って躍動したからこそ、反平家のエネルギーに火が点ぜられたのである。べんべんと時日を稼いでいたならば、平家は清盛の死後を立て直していたかも知れない。

三条邸を襲撃された以仁王は、いったん三井寺へ逃げこんだ。そこで宇治川へ出陣した源三位頼政と呼応して立とうとしたが三井寺の僧兵は動かず、頼政もまたたのんだ南都の堂衆が来着せず、簡単に全滅したため、以仁王は光明山へ逃げこんだのである。

矢疵をおって身一つでこの裏山へひそんだのである。

「ではこちらで養生を」

重源はあわれむように言った。以仁王は笑った。

「養生の効く身体でないことは、われが知っている。長い時ではない。ご坊は善知識となつて、われの死を見守って下さ

れい」

短い悲劇の人生には、それなりの美しさがある。さわやかな悟性がある。

数刻を出ぬ正午近く、以仁王は従容として三十年の生涯を閉じていった。

遺言は一つしかなかった。わが首をひと目でもいいから三条邸にいる妻三位局に見せてやって欲しい、ということであった。死の確認である。いや再会かも知れない。

重源は死に絶えた以仁王の首を掻き切つて、瓶におさめた。腐敗を防ぐために漆をつめこんだが、すでに半蔵、やはり変容はおびただしかった。

「それで、三条のお邸に知らせたのですか」

住蓮はいたましげに表情を結んだ。

「うむ。だが三位局はすでにいられなかった。八条院へ移られたとのことだ」

「それでも……」

「ただ移られただけではない。すでに新しい愛人がおられるそう」

「君の死もたしかめられぬうちに」

「兼実公がその愛人なのだ」

「いつまでもこうして」

「わしが祀つてあげるしか方策がないであらう。せめて七重の塔が完成したら、その地下にでもお埋め申上げようと思っている」

死んだ首になつてまで再会を願つた愛妻はすでに別の男の寵を得ていたのである。

ちなみに以仁王の亡妻三位局は、のちの関白兼実との間に良輔という子までもうけた。また以仁王との間には一男一女があつたが、孫王と呼ばれた男児は京都へ突入した木曾義仲によつて強く安徳帝の後嗣として即位することを推戴された。しかし後白河法皇はこれを受けつかなかった。

生涯を独身でとおし、歌にのみ情念をこもらせた実妹の式子内親王とともに悲劇の家系と言うほかはない。

住蓮が後栗房重源にとまなわれて京の街へ出かけたのは年も明けた治承五年の二月半ばである。この年は二月が二度あつて、閏の方である。

その四日に平清盛が息を引き取つた。

出京は清盛の菩提を弔うためのものではなかった。

重源は住蓮に案内をさせて、年が明けるとともに何度か奈良へ出かけた。焼失した七堂伽藍を、とりわけ炎をかぶつて焼けただれた大仏をつぶさに調査したのであつた。何とかしてご修復しなければ、とそのことばかりを言いつつていた。

ようやく修復の構想が成ったか。重源はその出費を邦綱大納言に持ちかけるべく、五条邸を訪ねたのである。

門前までくると、ひとりの僧が出てくるのに出会った。法然上人である。

大乗院信国——住蓮房が法然上人を見たこれが最初の瞬間である。

「そなたも大納言に」

重源は気軽に声をかけた。

「不思議な因縁です」

と法然上人はもの静かに言った。

「因縁とは」

「五条大納言も病いが篤くなれました」

「えっ、邦綱卿が」

「お気の毒なことです。平相国のあとを追われようとなさっています」

「では、ご自害でも」

「いや。みちびかれたのです。不思議な因縁によって」

法然が言いたいのは、天魔に魅せられたように熱病で世を去った平清盛。彼とともに金力財力で天下を壟断してきた大納言邦綱が、突然の発病で死への道を急いでいる、ということだ。

個人的には同情を禁じ得ないが、これも天命だというきびしい批判が、不思議な因縁という言葉の奥に秘められていた。法然は邦綱の戒師となつて、その門に出入りはしていたが、決して大福長者の黄金に屈しているのではなかった。

「そんなにお悪いのですか」

重源はがっくりとなる。彼の場合は、大仏復興の大スポンサーを失う落胆である。

「数日とおもちにはなりますまい。いまでも一切を皆懺悔することをおすすめしてきたところですよ」

「卿は何とおっしゃいましたか」

「三年でも五年でもいい、延命を願われていました」

「それで」

「阿弥陀仏のご意志でお迎えが来ているのです。ひとえに御名をおとなえして、と申してまいりました」

淡々と語る法然に、住蓮は見惚れた。人間の生死を、これほど見事に割り切れるこの僧は、どういう人なのであろうか
「では、わしなぞがいつても詮ないことですな」

重源はきびすをめぐらせた。

「さよう、お話もゆつくり出来兼ねるありさまです。どうですか、これから東山へまいりませぬか」

「ああ、あなたは近ごろ東山に住んでいらっしやるそうです

<京の街>



ね
「狭い庵居ですが、ひと休みなされるとよろしゅうございま
す」

三人は連れ立って五条の橋を渡っていった。

京の街には人間があふれていた。みんな何となく落着かず
に道を急いでいる。

内には清盛の死。外には源氏の旗上げで、平家の大軍が都
へなだれこんで、家々を占拠して泊りこんでいるのである。

家を追われた都人は右往左往するばかりである。
供の者をつれた馬上の若武者とすれ違った。

武者は法然の姿をみとめると馬からおりて、丁重に挨拶を
した。

「早くお舅どろを見舞ってあげなさい」

法然は促して、東山へ帰る足をいそがせた。

「今のは誰ですか」

重源の問いに、

「三位中将重衡どのです。大納言の聲どのです」

「あれが重衡ですか。仏敵奴が！」

怒りが重源の面上で波立った。

大仏殿を焼いた張本人なのである。

法然は相変らず微動だもしない表情でいた。

(つづく)

二 編集後記 二

○リーンリーン、ガチャガチャ……秋の夜長を鳴き通す……唱歌の文句ではないが、ようやくにして秋らしい秋となった。今年には記録破りの残暑が続き、彼岸を迎えても盛夏と変らぬ程であり、いささか閉口させられた。その反動ではないが天高き青空のもと、野に山に大いにこの好季を満喫したいものだ。

○満喫、充分に食べ飲み味わうといえは、酒のうまい季節でもある。酒好きの人は別に季節など関係ないというであろうが、涼気深い夜、チビリチビリとやれば、いかに酒弱い人でもある程度は量がすすむであろう。そこで今月号の現代のモラルを考える特集では「飲酒」を取りあげてみた。仏教では「飲酒」を五戒の中にあげ、最も大切な生活規範の一つとしているが、一方で「般若湯」と称して公然と門内に入れ親しまれてきている。これは「酒は飲んでも酒

には飲れるな」という概念を拡大解釈したものを取られているが、さてどうか。この特集をとくと味読願いたい。

○ハワイ開教区新保義道師より原稿が届いた。日本人の観光ツアーで年中賑わうハワイ、一週間のレジヤーとしては格好の夢の島であろう。しかし、大きな夢をいदैてハワイに渡った開拓者には苛酷な島であった。途中で挫折した人びともかなりあったという。今月号から三回にわたって掲載する「ハワイに生きる・日系人社会史」は、この間のできごとを如実に物語っている。今日でこそ各方面で日系人が活躍されているが、ここに至るまでの先駆者の心血をそぐ努力を忘れてはなるまい。

○今月から十一月にわたり、浄土宗各寺院では賑やかに「十夜法要」がごとめられるが、このお十夜と切り離すことのできないものに双盤念仏がある。これを守る民俗色豊かな鐘講中について三浦市光念寺住職高麗義光師から、分りやすく執筆いただいた。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年九月二十五日 印刷
昭和五十年十月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
千一〇二 振替東京八二一八七番

文部省出版助成図書

徳本行者全集 全五巻 第一巻 発売

定価 8500円（送料共） 第一巻 A 5 判 530ページ

近世浄土宗史において庶民に対して絶大なる教化力をもった徳本行者の全生涯、勸化聞書、請待日記、和歌等を網羅。研究の資料に教化の参考に是非この全集をおそなえ下さい。

発行所 山喜房仏書林（東京大学赤門前）

申込所 〒170 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

大正大学内 浄土学研究室

振替（東京）151610 番

昭和51年度版 『浄土宝暦』

B 6 判 40 ページ

定価 45 円 200部以上 40円（送料実費）

好評『法然上人と浄土宗』

B 6 判 96頁 定価180円（〒70円）

（200部以上 単価160円 送料実費）

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262 - 5944 番